倭奴国王冊封以前の鏡と青銅器原料

岡村　秀典

はじめに

『後漢書』光武帝紀には建武中元二年（五七）春正月に「東夷の倭奴国王、遣使奉献す」とあり、同東夷伝には「建武中元二年、倭奴国、奉貢朝賀す。（中略）光武、賜うに印綬を以てす」という。このとき倭奴国王の使いが後漢のみやこ洛陽にて元会儀礼に参列し〔渡辺一九九六：二〇〇～二〇四頁〕、光武帝より印綬を賜与された。それが福岡市志賀島から出土した「漢委奴国王」金印である。

王莽が西暦二三年に滅亡した後も全土で混乱がつづき、光武帝が中国を再統一したのは四川の公孫述を滅ぼした三六年のことである。東方ではそれより早く三〇年に楽浪郡の王調の乱が平定され、東夷諸族が相次いで入朝するようになった。まず、三二年に高句麗が朝貢し、光武帝はその王号を復した。四四年には韓の廉斯の蘇馬諟らが貢献し、光武帝はこれを漢廉斯邑君に封じた。四九年より夫余王は毎年のように朝貢するようになった。このような情勢のなかで、五七年に倭奴国王が遣使奉献したのである。光武帝はその翌月に崩じたから、光武帝期における東夷諸族の朝貢のなかでは最後になるが、王・侯・君・長という外臣の階層的序列のなかで、高句麗王や夫余王に並ぶ最高位の王に倭奴国の首長が位置づけられたことは、海を隔てた絶域からの朝貢に対する後漢王朝の歓迎ぶりをよく示している〔岡村一九九九：八六～九二頁〕。

一　平原一号墓出土鏡の再検討

（1）日韓出土の方格規矩四神鏡Ⅳ式

王莽期を含む前漢時代の方格規矩四神鏡は四型式に細分され、最後のⅣ式において主紋の四神と鈕座の十二支銘が定式化する〔岡村一九八四〕。その年代は、Ⅱ式の永始二年（前一五）鏡とⅢ式の始建国天鳳二年（後一五）鏡によって定点がえられ、「漢（新）有善銅」銘のⅢ式は漢新交替期、「尚方御」や「王氏作（昭）」銘のⅣ式は新莽期に編年される。四神と瑞獣からなる八像に小像や渦紋を加えた主紋aをもつⅣ式につづいて、後漢前期の漢鏡5期には、四神と瑞獣の八像からなる主紋bをもつⅤA式、主像の鳥が三羽以上になったり、玄武の亀と蛇が分離したりするなど、四神と瑞獣の組合せが不完全になるⅤB式、主像すべて鳥になったⅤC式に変化する。つまり、Ⅳ式に定式化した主紋が、鈕座の十二支銘が消失するのにともない、ⅤA式からⅤC式へとくずれてゆくプロセスとして理解できる〔岡村一九九三b〕。

こうした紋様の変化にともない、方格規矩四神鏡の銘文も大きく変容した。それを日韓出土の「尚方御（佳）」方格規矩四神鏡Ⅳ式の三面を例に比較することにしよう（図1）。

まず、大阪府茨木市紫金山古墳出土「尚方御」鏡（図1の1）は、径二三・八センチ、典型的なⅣ式の優品であり、内区外周には次の銘文がある。

新有善同出丹陽。湅治銀錫清而明。
尚方御竟大毋傷。巧工刻之成文章。
左龍右虎辟不羊。朱鳥玄武順陰陽。
子孫備具居中央。長保二親樂富昌。壽敝今石如侯王。

第一行では新莽期に丹陽産の善銅を用いて精錬したこと、第二行では尚方の名工が制作した宮廷鏡であること、第三行では青龍と白虎は不祥をしりぞけ、朱雀と玄武は陰陽を調えるはたらきをもつことを記し、第四行はその結果として期待される効能書きである〔岡村二〇一九〕。

ところが、佐賀県唐津市桜馬場甕棺墓出土「尚方佳」鏡（図1の2）は、径二三・二センチの優品であるが、銘文は次のように変容している。

尚方佳竟眞大好。上有仙人不知老。渴飲玉泉飢食棗。浮游天下敖四□。徘徊名山采芝草。壽如金石之國保兮。

第一句に「尚方佳」鏡をうたうものの、第二句から第五句まで仙界に棲む仙人の生態を描写し、末句に本鏡の効能を記している。しかし、そこでは主紋の四神にふれることがなく、主題となっている仙人図像については、「未」の方角に騎獣の小像、「卯」の方角に芝草をもつ小像をあらわすだけであるから、紋様と銘文の内容が乖離している。

韓国の慶尚南道良洞里出土「尚方佳」鏡（図1の3）は、径二〇・五センチ、紋様はいっそう簡略化し、銘文は次の四句に減少している。

尚方佳竟眞大□。上有仙人不知老。渴飲玉泉飢棗。浮由天下敖三海。

主紋は四神を含む八像からなるが、仙人像は完全に消失している。

以上三面の紋様と銘文は1鏡→2鏡→3鏡の順に簡略化しているが、銘文をもとに、1鏡をⅣA式、2・3鏡をⅣB式に二分する。後者の銘文は樋口隆康〔一九五三〕分類のK類（以下「樋口K類」という）で、5期の「尚方作」方格規矩四神鏡に継承されるが、その祖型は長沙市金塘坡八号墓出土の方格規矩四神鏡〔湖南省博物館一九七九〕Ⅲ式などにみえる次の銘文であろう（集釈四五三）。

此有佳鏡成獨好。上有山人不知老。渴飲澧泉飢食棗。浮游天下敖三海。壽敝金石爲國保。

つまり、このパターンの銘文は主に起句が変化し、方格規矩四神鏡Ⅲ～Ⅳ式にはこの「此有佳鏡成獨好」と「作佳鏡哉眞大好」（集釈四五〇）が用いられ、つづく同Ⅳ～Ⅴ式に樋口K類の「尚方佳（作）竟眞大好（巧）」（集釈四五一）として定型化したと考えられる。

以上のように「尚方御（佳）」方格規矩四神鏡の紋様はⅣA式からⅣB式へと一系列に変化しているが、ⅣA式の1「尚方御」鏡とⅣB式の2・3「尚方佳」鏡とは、銘文の内容と系列を大きく異にしている。前者は王莽宮廷鏡として長安か洛陽で制作されたのに対して、5期の「尚方作」鏡に継承される後者は、おそらく淮南の「尚方」工房にて制作されたからであろう。つまり、ⅣA式とⅣB式とは年代差であり制作地の別でもあり、銘文にあらわれた様式からみると、ⅣB式はⅤ式に改めるのが妥当であろう。しかし、型式変更にともなう混乱を避けるため、あえてそのままⅣB式とし、漢鏡5期に位置づけることにしたい。

ⅣA式の1鏡は「新有善同」銘をもつことから新莽期に位置づけられるとしても、ⅣB式の2・3鏡については年代を決める手がかりに乏しい。とはいえ、桜馬場甕棺墓において2鏡には漢新交替期の方格規矩四神鏡Ⅲ式や新莽期の四葉座ⅠA式内行花紋鏡がともなっており、下っても西暦二〇年代ではなかろうか。王莽の滅亡後、江淮一帯では淮南王を自称する李憲が公卿百官を置いて自立し（『後漢書』李憲伝）、楽浪郡では王調の乱が勃発したから（同光武帝紀）、2・3鏡の生産と流通はかれらが光武帝に制圧される三〇年前後であろう。

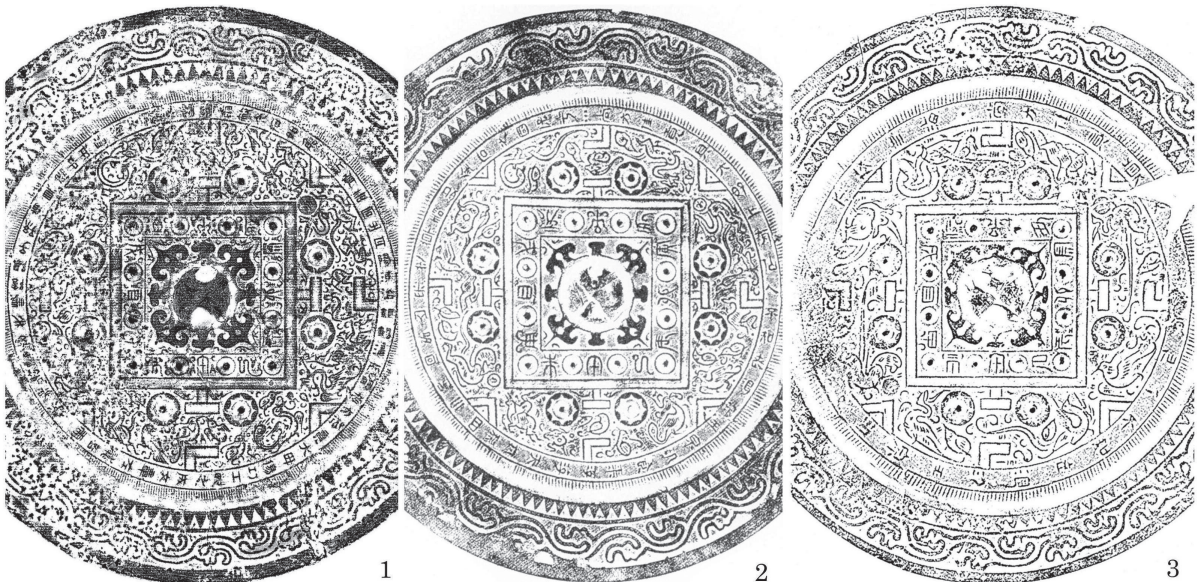

図1　日韓出土の方格規矩四神鏡Ⅳ式

1：大阪府紫金山古墳出土鏡〔上原 2005：図 60〕、2：佐賀県桜馬場甕棺墓出土鏡〔小田・韓編 1991：図 93〕、3：韓国慶尚南道良洞里出土鏡〔同：図 44〕

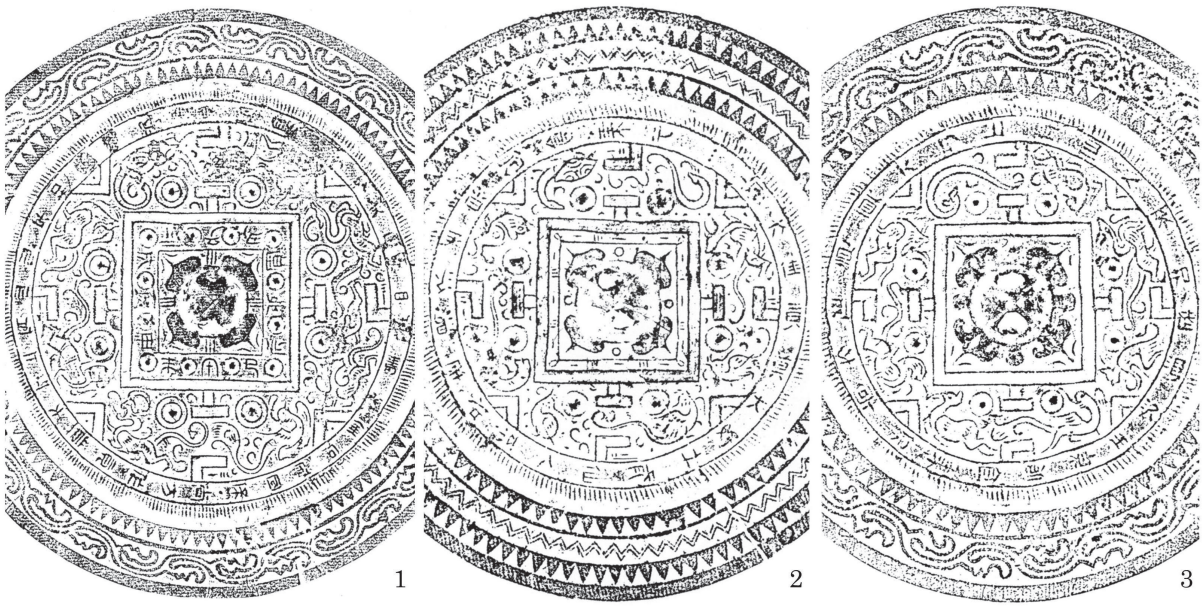

図2　福岡県平原1号墓出土方格規矩四神鏡

1：「尚方作」3 号鏡、2：「尚方作」19 号鏡、3：「尚方佳」8 号鏡〔岡部編 2017：図 31・44・33〕

（2）平原一号墓出土の方格規矩四神鏡

福岡県糸島市平原一号墓は辺一三メートルほどの方形周溝墓で、中心主体の割竹形木棺から三二面の方格規矩四神鏡がまとまって出土した。その内訳はⅢ式一面、ⅣB式五面、VA式一九面、VB式七面である。銘文をもたない4期後半のⅢ式をのぞく三一面の外区には流雲紋と鋸歯紋があり、銘文はすべて樋口K類である〔岡村一九九三a〕。

図2の三面を例にみると、1「尚方作」鏡（三号鏡）は、径二一・〇センチ、主紋の四神が完備し、鈕座に十二支銘をもつVA式である。図1の3「尚方佳」鏡と比べると、主紋の青龍・白虎に配された日・月や副像の小鳥などが消失し、乳座の連弧紋が円圏に変化しているが、銘文は五句もあり、ⅣB式との型式差は小さい。これに対してVB式の2「尚方佳」鏡（一九号鏡）は径一五・九センチ、3「尚方作」鏡（八号鏡）は径一六・一センチに小型化している。また、2鏡の鈕座は十二支銘が紋様化した線紋（十二支c）になり、3鏡では十二支銘の区画が消失している。これにともなって主紋の四神がくずれてゆき、2鏡では玄武の亀と蛇が分離し、3鏡では亀が消失して蛇だけになっている。このように平原一号墓からはⅣB式からVB式まで三型式にわたる方格規矩四神鏡三一面が一括出土し、その約六割を占めるのがVA式である。

その制作者には「尚方」と「陶氏」がある。「尚方佳（作）」はⅣB～VB式の二二面であり、後出する「陶氏作」はVA・VB式の九面である。5期の方格規矩四神鏡において個人工房の作例はめずらしいが、「尚方」鏡と「陶氏」鏡の作風は近似していることから、「陶氏」は淮南の「尚方」工房の近くで作鏡に従事していた可能性が高い。また、「尚方佳（作）」鏡のうち三種八面と「陶氏作」鏡のうち三種六面は、同一原型からつくられた同型鏡であり、いずれもVA・VB式である。

平原一号墓の出土鏡を整理報告した柳田康雄〔二〇一七〕は、方格規矩四神鏡の一七面に意図的な着色が認められること、「陶氏作」はほかに例がないこと、主紋の玄武が省略されたり、魚紋が加えられたり、中国鏡には例のない鈕座紋様があること、銘文に「壽敝金石」・「宜古市」・「相保」など樋口K類にはない語句があること、銘文の「四」を「三」ではなく「四」と表記していること、六種一四面の同型鏡があること、鋳造不良のため、紋様が不鮮明になったり、側面や鏡面に巣が生じたりしたものがあることなど、三五件のポイントを指摘し、墓の造営された西暦二〇〇年ごろに中国からの渡来工人が伊都国で制作した仿製鏡と結論づけた。しかし、その紋様は中国出土鏡で設定した上述のⅣB～VB式のバリエーションの中で十分に説明できるし、逆にそれだけのバリエーションが一五〇年あまり後の渡来工人によって模作された可能性は低く、そもそもその年代は鏡の型式から導きだされたものではない。また、銘文についてもⅣB式の桜馬場鏡（図1の2）に「四」や「壽如金石」という語があり、強いて仿製鏡とみる必要はない。

鉛同位体比分析によれば、その方格規矩四神鏡はすべて前漢鏡タイプの領域Aに属している。領域A内の分布は、A式図の横軸で値の低い領域ALと高い領域AHに二分され〔馬淵ほか一九九一〕、VA式の段階に領域ALから領域AHへと遷移している（馬淵二〇一六ではWLとWHに名称変更）。同型鏡でみると、VA式の「尚方作」二六号鏡は領域AL、同二四・二五号鏡は領域AHに属し、VA式の「陶氏作」三八号鏡は領域AL、同三九号鏡は領域AHに属している。ちなみに新莽期の方格規矩四神鏡ⅣA式はすべて領域ALであり〔岡村二〇二一〕、領域AH原料の産地について馬淵久夫〔二〇一六〕は秦嶺褶曲帯（桐柏山脈・大別山脈）の鉱床と推測しているが、淮南ではVA・VB式の段階にそうした別の原

料を用いたのであろう。また、「尚方」工房と「陶氏」工房とが同じ産地の原料を共有する近しい関係にあったことも確かである。ただし、「陶氏作」鏡で領域ＡＬに属しているのは三八号鏡のみであるから、「陶氏」工房での作鏡は鏡群の後半期が主であったと考えられる。

王莽滅亡のころに出現した「尚方作」方格規矩四神鏡は、ちょうどⅣＢ～ⅤＢ式の段階に形式化が進んだ。その頽廃に不満をもつ鏡工たちは六〇年代に「青盖」「三烏」など有志のグループを立ちあげ、民間市場に向けた作鏡活動をはじめ、ほどなくして「尚方」工房から自立していった〔岡村二〇一〇〕。このような作鏡動向からみれば、これら「尚方」工房主導のもとで制作された平原一号墓の方格規矩四神鏡は、前後に広く見積もっても二〇～六〇年代に位置づけられる。

（3）平原一号墓の超大型内行花紋鏡

平原一号墓からは径四六・五センチという超大型内行花紋鏡が五面出土している（図3右）。この五面は同型鏡であり、漢鏡には例のない大きさと紋様をもつため、筆者は通説にしたがい日本の仿製鏡と考えた〔岡村一九九三a〕。しかし、福岡県春日市須玖タカウタ遺跡などで土製鋳型を用いた高度な鋳造技術が明らかになりつつあるとはいえ、このような超大型鏡の類例は一面も出土していない。反対に車崎正彦〔二〇〇二〕は、中山簡王劉焉の墓に比定される河北省定州市北荘漢墓出土の凹帯連弧紋鏡（図3左）は径三六センチの大きさがあり、光武帝の子劉焉の中山王冊封は五四年で、倭奴国王の冊封年代に近いことから、平原の超大型内行花紋鏡も方格規矩四神鏡と同時期の後漢鏡とみている。車崎は明言を避けているが、中山王と同じように光武帝が倭奴国王の冊封にともない特別に鋳造して贈与したと推測するのであろう。福永伸哉〔二〇〇八〕

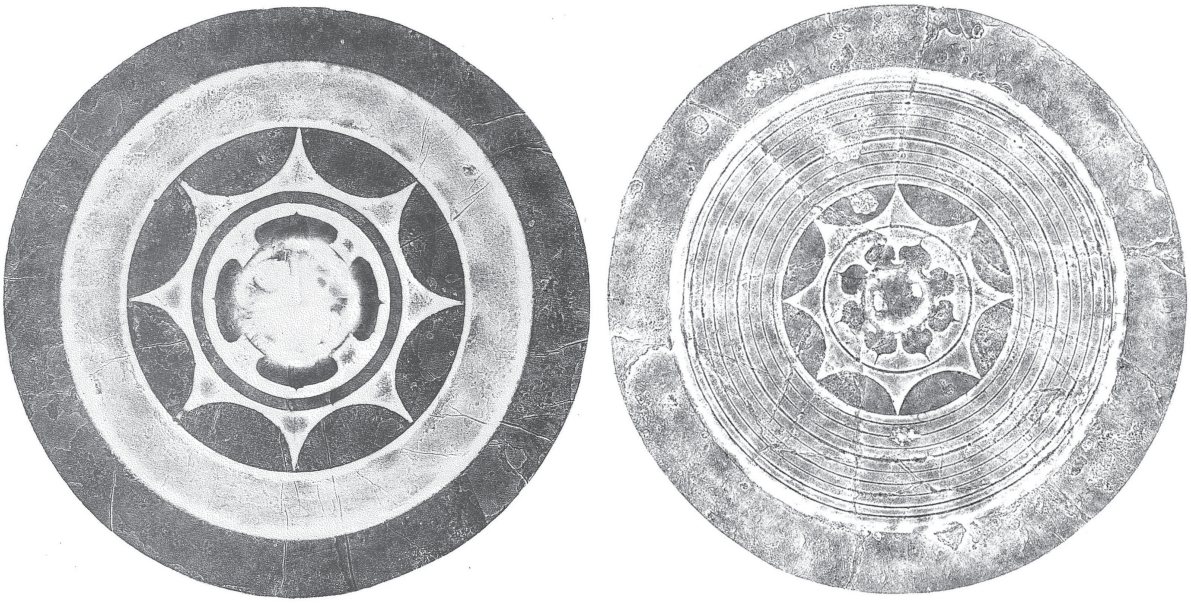

図３　超大型内行花紋鏡

左：河北省定州市北荘漢墓出土鏡〔河北省文物研究所 1996：図 56〕、右：福岡県平原1号墓出土 10 号鏡〔岡部編 2017：図 34〕

も平縁の外区と連弧紋の間を広げて超大型の鏡につくる手法が北荘鏡と通じていることを指摘している。

鉛同位体比をみると、平原の超大型内行花紋鏡は五面とも領域Aに属している。第三節に検討するように鉛同位体比は5期前半において領域Aから領域Bに転換するから、平原の超大型内行花紋鏡は倭奴国王冊封に際して制作されたと考えても矛盾はない。

（4）倭奴国王冊封にともなう鏡

西暦五七年ごろに流通していたのは井原鑓溝出土の4期後半鏡ではなく一世紀第2四半期の5期前半に下る鏡であるから、倭奴国王の使者が将来した有力候補が平原一号墓出土の方格規矩四神鏡三一面である。そのうちⅣB式の五面は、同型式の桜馬場鏡（図1の2）や良洞里鏡（同3）といっしょに楽浪郡を経由する市場ルートで先行してもたらされた可能性が高い。これに対してVA・VB式には六種一四面の同型鏡を含む二六面があり、西暦三〇年代以降の制作であるから、倭奴国王冊封の直前に位置づけられる。しかし、銘文に「尚方作（佳）」とあるものの、そのほとんどは面径二〇センチ以下の標準的な大きさであり、民間に流通している鏡とのちがいはない。しかも、制作地はみやこ洛陽から遠く離れた淮南である。後漢王朝が倭に贈るために淮南から既製品を取り寄せた可能性はあるものの、その二六面はむしろⅣB式と同じ楽浪郡を経由する市場ルートでもたらされたのであろう。

これに対して平原の超大型内行花紋鏡は、つとに車崎正彦〔二〇〇二〕が指摘したように中山王劉焉墓出土例に類似し、倭奴国王に贈るため特別に制作されたと考えるのが妥当である。内行花紋鏡はそのころ中原で流行していた代表的な鏡種であることに加えて、民間に流通していたのは面径二〇センチ以下のものがほとんどであるのに、それは中山王墓例をもしのぐ径四六・五センチという超大型鏡である。海を隔てた絶域からの朝貢を嘉するために特鋳され、光武帝の主宰する朝賀のセレモニーの一環として倭人に特別に賜与された蓋然性は高い。しかし、倭人の朝貢はもとより不定期であり、光武帝はその翌月戊戌（二月五日）に崩じたことから、倭に向けた特異な超大型鏡の制作はその一度きりで終わってしまったのだろう。

それでは倭奴国王冊封以前の鏡はどのようであったか、序論が長くなったが、ここから本論に入ることにしたい。

二　朝鮮半島から伝来した鏡と青銅器原料

（1）多鈕細紋鏡

弥生前期末から中期前半の日本列島に出現したのが多鈕細紋鏡である。それは二ないし三個の鈕をもち、鏡背の全面に細い線で幾何学的な紋様をあらわした鏡である。日本では長崎県から長野県まで一二面出土し（表1）、すべて朝鮮半島で制作されたと考えられる。もっとも福岡県春日市須玖タカウタ遺跡から銅剣・矛・戈・小銅鐸などの土製・石製鋳型にともなって多鈕鏡の滑石製鋳型片が出土し〔森井編二〇一七〕、遺構の年代は弥生中期前半にさかのぼる。しかし、それは日本出土鏡には例のない粗い紋様であり、この鋳型を用いて鋳造した痕跡がないことから、この鋳造工房では多鈕鏡が試作されたものの、制作が継続されなかったと考えられている〔辻田二〇一九：二八～三〇頁〕。

多鈕細紋鏡は、長崎県里田原、佐賀県本村籠・増田・宇木汲田では甕棺墓、福岡県吉武高木では木棺墓、山口県梶栗浜では箱式石棺墓に副

表１　日本出土の多鈕細紋鏡（▲は破鏡）

都府県	市町村	遺跡名	遺構	時期	径	状態	共伴品	備考	下垣集成
長崎	壱岐市	原ノ辻	不明	不明		破片			長崎 76-4
	平戸市	里田原	3 号甕棺墓	中期初頭	9.0		小壺形土器		長崎 57-1
佐賀	佐賀市	本村籠	SJ-58 号甕棺墓	中期初頭	10.5		銅鉇、玉類	鉛ラインＤ	佐賀 91
		増田	SJ6242 号甕棺墓	中期初頭	9.0				佐賀 193
	唐津市	宇木汲田	12 号甕棺墓	中期初頭	10.5		細形銅剣 1		佐賀 143
福岡	福岡市	吉武高木	3 号木棺墓	中期初頭	11.0		細形銅剣 2・矛 1・戈 1、玉類、土器	鉛ラインＤ	福岡 172
	小郡市	若山	94 号土坑	中期前半	15.3		甕形土器		福岡 640
					16.0				福岡 641
山口	下関市	梶栗浜	箱式石棺墓	前～中期	8.8		細形銅剣 2	鉛ラインＤ	山口 58
大阪	柏原市	大県（高尾山）	不明	不明	21.7			鉛ラインＤ	大阪 117
奈良	御所市	名柄	不明	不明	15.6		外縁付鈕式銅鐸	鉛ラインＤ	奈良 302
長野	佐久市	社宮司	不明	後期		▲２孔	土器、玉類、鉄器片	鉛ラインＤ	長野 47

＊備考欄の「鉛」は鉛同位体比の領域、「下垣集成」は下垣仁志〔2016〕の番号。以下同じ。

葬され、宇木汲田・吉武高木・梶栗浜では細形銅剣がともなっている。このような墓への副葬は朝鮮半島の風習がそのまま伝来したのだろう。

これに対して福岡県若山遺跡では、多鈕細紋鏡二面が集落内の小土坑に重ねて埋納され、上には甕形土器がかぶせられていた。また、大阪府大県では標高二七八メートルの高尾山の山頂付近から、奈良県名柄では葛城山東麓の高台から、それぞれ多鈕細紋鏡が偶然に出土し、名柄では三〇センチほど離れたところから外縁付鈕式銅鐸が発見されたという。大県鏡は径二一・七センチ、多鈕細紋鏡のなかで最大であり、北部九州における墓の副葬鏡が約九～一一センチであったのに対して、若山鏡二面と名柄鏡も一五センチあまりの大きさがある。

また、千曲川上流の長野県社宮司遺跡では、弥生後期の土器内から多鈕細紋鏡片が勾玉・管玉・鉄器片とともに出土した〔永峯一九八八〕。鏡は鈕を含む破片であり、垂下用の紐通し孔を二か所に穿ち、縁辺を研磨している。大賀克彦〔二〇二〇〕は共伴した玉類をもとに遺構の年代を弥生中期後葉としている。

（2）化学分析による原料産地の推定

鉛同位体比分析によって、漢鏡を含む日本出土青銅器は朝鮮系遺物タイプ（ラインＤ）→前漢鏡タイプ（領域Ａ）→後漢鏡タイプ（領域Ｂ）へと変化し、方鉛鉱の分析データによってそれぞれ朝鮮半島産、華北産、華中・華南産の原料と推定された〔馬淵・平尾一九八三ほか〕。多鈕細紋鏡や細形銅剣など日本出土の朝鮮系青銅器によって設定されたラインＤ原料は、菱環鈕式から外縁付鈕１式までの古い銅鐸にも用いられ、以後の型式は領域Ａへと整合的に移行していることから、弥生青銅器の原料も併行して朝鮮半島から輸入されていたことが推測された。また、弥生中

期におけるラインDから領域Aへの移行は、紀元前一〇八年に漢武帝が衛氏朝鮮を滅ぼして楽浪郡など朝鮮四郡を設置したことが契機になったと推測されている〔馬淵・平尾一九八二〕。

しかし、ラインD原料について新井宏〔二〇〇〇〕は、朝鮮半島産ではなく長江上流域に産する「高放射性起源鉛」（本誌所収の「黒川古文化研究所蔵銅盂の化学分析報告」にいう領域SのMVT異常鉛と領域S-B間の異常鉛）であり、それを用いた殷周青銅器のリサイクルと主張する。大賀克彦〔二〇二〇〕もラインDに対応する鉱床は朝鮮半島南部に存在しない可能性が高いという。また、吉武高木一号木棺・一一六号甕棺墓出土例など一部の細形銅剣は領域Aに分布し〔平尾・鈴木一九九九〕、なお問題をのこしている。ラインD原料の産地同定は今後の課題としても、朝鮮半島から多鈕細紋鏡や細形銅剣などの青銅器にともなって弥生青銅器の原料も大陸から輸入されたことはまちがいなく〔齋藤二〇〇三〕、対外交易を考えるとき弥生青銅器の原料も合わせ検討する必要があろう。

（3）多鈕細紋鏡と青銅器原料の東方流入

弥生中期前半には北部九州の各地で青銅器生産がはじまり、青銅器原料も広域に流通した。とりわけ背振山地南麓の嘉瀬川流域では、増田遺跡と本村籠遺跡の甕棺墓から多鈕細紋鏡が、近傍の惣座遺跡や鍋島本村南遺跡から細形銅剣・銅矛・銅戈の鋳型、土生遺跡から銅鉇の鋳型が出土し、多く朝鮮系無紋土器がともなっていることから、田中稿二〔一九九三〕は半島からの渡来集団が嘉瀬川流域に定着し、各種の青銅器を生産していたと考えている。多鈕細紋鏡と青銅器原料も半島からの渡来人が将来した可能性が高い。

銅鐸の鋳造において外縁付鈕1式の段階は中河内の中山型と生駒山西麓の慶野型が工人集団の主系列であり、その1式末から2式に下ると、大阪府茨木市東奈良遺跡や奈良県田原本町唐古・鍵遺跡を拠点とする工人集団が出現するという〔難波二〇一一a〕。また、鉛同位体比の測定された外縁付鈕1式銅鐸二二個のうち一七個はラインDに分布するが、多鈕細紋鏡にともなう奈良県名柄銅鐸などの五個は前漢鏡タイプの領域Aに属し、外縁付鈕2式以降と共通する紋様をもつことから、難波はこの五個を東奈良の工人集団によって制作されたものと考え、外縁付鈕1式末に位置づけている〔同上〕。この説にしたがうならば、外縁付鈕式銅鐸の段階にラインD原料、つづいて領域A原料が大阪平野にもたらされ、大県と名柄の多鈕細紋鏡はおそくとも外縁付鈕1式銅鐸の段階までに原料と同じルートで朝鮮半島から伝来したと考えられる。

中部高地の社宮司遺跡で発見された多鈕細紋鏡片について、流入の時期とルートを考える手がかりになるのが、千曲川を下った長野県中野市柳沢遺跡から出土した青銅器群である。そこでは外縁付鈕式～扁平鈕式銅鐸五点、大阪湾型銅戈a類七点、北部九州の中細形銅戈C類一点がまとまって出土した。遺跡の年代は弥生中期後半に下る〔廣田編二〇一二〕。それらの化学分析をもとに難波洋三〔二〇一二a〕は、慶野型に近い外縁付鈕1式銅鐸と大阪湾型銅戈のA群、外縁付鈕2式～扁平鈕式古段階銅鐸・中細形銅戈のB群に大別し、A群の鉛同位体比はラインD、B群のそれは領域Aに属していること、錫の含有量は、A群は一一～一五%と多いのに対してB群は二～五%と少なく、微量元素のアンチモンと砒素の濃度と比率もA群とB群で異なっていることをあげ、少なくとも現地には前後二期の流入があったと考えている。この説にしたがえば、社宮司の多鈕細紋鏡は、これらA群の青銅器と同じ大阪平野を経由するルートでもたらされた可能性が高い。

多鈕細紋鏡の出土数からみると、北部九州は八面、近畿は二面であるから、北部九州の出土数が圧倒的に勝っているが、弥生中期前半における青銅器原料の輸入量を考えるならば、大阪平野で鋳造された外縁付鈕式銅鐸や大阪湾型銅戈の総量は北部九州に比肩するほど大きかったと推量される。近畿において多鈕細紋鏡は大県や名柄のように人里離れたところに埋納されたため発見数が少ないものの、大県鏡の面径は多鈕細紋鏡のなかで最大であり、名柄鏡も比較的大きいことからみれば、近畿中枢部の弥生社会はすでに鏡や青銅器原料を入手する相応の経済力を有していたことは確かであろう。

三　鉛同位体比と漢鏡編年

（1）前漢鏡タイプの領域A

前漢鏡は大きく四期に分けられる。日本から出土するのは2期以降の鏡であり、その鉛同位体比はおおむね領域Aに分布している。ところが、三雲南小路一号甕棺墓から出土した2～3期鏡は、測定した一二点のうち七点は領域Aに位置するが、五点はそこから外れている〔馬淵・平尾一九八五〕。馬淵らはA式図で領域Aの少し下に外れた3期後半の連弧紋銘帯鏡（五号鏡）は中国系原料に朝鮮系原料を少し混ぜたもの、領域Bの近くでラインDの上方に位置する2期の重圏彩画鏡（一号鏡）と3期後半の連弧紋銘帯鏡（三号・六号・一四号鏡）を朝鮮系原料に若干の中国系原料を混ぜたものと推測している。しかし、分析試料は鏡片の表面に付着した銹を採取していること、中国製とみられる金銅四葉座金具二点はラインDに位置していること、朝鮮半島系の細形銅矛や中細形銅剣・銅戈・銅矛など古い武器形青銅器がともなっていることからみれば、墓中でのコンタミネーションが疑われる。あるいは、前漢鏡の五面に両種の原料が混合されたのであれば、ラインDは朝鮮半島産ではなく中国産と考えるのが妥当であろう。

4期では領域Aに属さない漢鏡が三面ある。佐賀県二塚山二九号土坑墓の獣帯鏡Ⅱ式、福井県花野谷一号墳の異体字銘帯鏡Ⅴ式（昭明鏡）、京都府八幡東車塚古墳の内行花紋鏡四葉座Ⅰ式は、いずれも領域Bに属している。二塚山は弥生後期墓であるが、花野谷鏡と八幡東車塚鏡は前期古墳の出土であるから、後漢時代に下る踏み返し鏡とみるのも一案である。しかし、花野谷鏡は紋様がいちじるしく摩滅し、鈕が破損したため周縁に懸垂用の二孔を穿っていることから、日本列島における長期の伝世を推測させる。また、次項でみるように、四通八達の淮南において制作された5期前半鏡の鉛同位体比には、領域AL・AH・領域Bという三種の原料が用いられていたから、4期にあっても領域A原料だけが一元的に用いられたと考える必要はないだろう。

（2）漢鏡5期前半における領域Aから領域Bへの転換

内行花紋鏡の鉛同位体比について馬淵久夫〔二〇一一〕は、岡村分類の四葉座Ⅱ式において領域Aから領域Bに転換するという。それを細かくみると、四葉座Ⅱ式のなかでも福岡市那珂遺跡群SC〇四一住居址出土鏡など古いタイプは領域Aに属し、楽浪王盱墓出土鏡など新しいタイプは領域Bに属している。また、広島県壬生西谷SK三三土坑墓出土の内行花紋鏡は、四葉座Ⅱ式の変異型式だが、鉛同位体比は領域Aと領域Bの中間値を示している〔馬淵一九八九〕。

これに対して淮南で制作された5期前半の方格規矩四神鏡は、領域Aから領域Bへと曲折をへながら転換した。前節にみたように、平原一

号墓から出土した三一面のⅣB～VB式は、VA式の段階に領域ALから領域AHへと遷移し、同型鏡のなかにも領域ALと領域AHの両方が存在している。また、奈良県大和天神山古墳から出土した六面のⅣB～VA式には領域ALと領域Bの両方が存在しているほか、福岡県井原ヤリミゾ六号木棺墓のVA式は領域AL、佐賀県椛島山箱式石棺墓のVB式は領域Bである。このように方格規矩四神鏡のⅣB～VB式には、少なくとも領域A原料と領域B原料の二種が併用されていたのである。

前漢鏡タイプの領域Aは華北産、後漢鏡タイプの領域Bは華中・華南産の原料とされる〔馬淵・平尾一九八七ほか〕。華中の淮南は四通八達の要地であり、5期に方格規矩四神鏡を制作していた淮南では、各地から三種以上の原料を継続的に入手していたのであろう。領域B原料を用いた4期鏡の例も、そうした原料入手の多元化のあらわれであったのかもしれない。しかし、領域A原料は方格規矩四神鏡VB式と内行花紋鏡四葉座Ⅱ式を最後にほとんど消失する。それは両鏡種とも5期前半のほぼ同時期のことであり、王莽滅亡にともなう動乱と華北産といわれる領域A原料の枯渇が原因と考えられる。

古墳出土漢鏡の伝世を否定し、その制作を古墳の造営年代に近づけようとする説がある。しかし、鉛同位体比をみると、上述資料のほかに、3期では香川県石清尾山猫塚古墳の連弧紋銘帯鏡、4期では福岡県平原一号墓・同南方浦山古墳・島根県小屋谷三号墳・岡山県鋳物師谷一号墓の雲気禽獣紋鏡、広島県中井出勝負峠八号墳の昭明鏡、大阪府紫金山古墳・岐阜県美濃観音寺山古墳の方格規矩四神鏡、京都府椿井大塚山古墳・静岡県松林山古墳の内行花紋鏡、5期では広島県月見城ST二古墳の内行花紋鏡がいずれも領域Aに属している。したがって、これらは一世紀中葉以前に制作された伝世鏡と考えられる。

四　弥生後期の実年代と青銅器の画一的な領域a原料

（1）北部九州における弥生後期の実年代

北部九州における弥生後期の土器編年は、日常土器について高三潴式・下大隈式・西新（町）式〔森一九六六〕、甕棺について桜馬場式・三津式・日佐原式が設定された〔森一九六八〕。そのうち桜馬場式は、佐賀県唐津市桜馬場において一九四四年の発見直後に龍渓顕亮が作成した甕棺のスケッチ図だけが唯一の手がかりであったため、その特徴をめぐって議論になっていたが、唐津市教育委員会が二〇〇七～〇八年に現地を再調査し、完形に復元できる棺体A（下甕）と底部だけの棺体Bを発掘した〔仁田坂編二〇〇八〕。蒲原宏行〔二〇〇九〕は口頸部・胴部・底部の属性分析をもとに「棺体Aは橋口編年KⅣb式新相の二塚山七六号下棺と同時期かやや先行するもの」で、「佐賀平野の村徳永3式に併行する」「弥生時代後期前半新段階の古いところ」と結論づけた。この甕棺墓から出土した三面の鏡は、4期後半から5期前半の一世紀前葉に位置づけられる。

三津式の指標とされたのが、4期後半の「叅言」獣帯鏡が出土した佐賀県三津永田一〇四号甕棺である〔杉原・原口一九六一〕。それは井原鑓溝の鏡群と同時期だが、桜馬場には5期前半の方格規矩四神鏡ⅣB式を含むため、桜馬場式→三津式という甕棺編年とは逆転していた。

三津永田の東三キロに位置する二塚山遺跡では、4期前半の昭明鏡（異体字銘帯鏡V式）が出土した二塚山七六号甕棺墓は二塚山V（三津式）期とされる〔石隈・七田編一九七九〕。しかし、橋口達也〔一九七九〕は二塚山七六号甕棺をKⅣb式、三津永田一〇四号甕棺をKⅣc式とするから、橋口編年の方が漢鏡編年と整合している。

佐賀県小城市丁永遺跡6区ではSJ〇六甕棺墓から4期前半の昭明鏡が出土し、甕棺は三津式（蒲原編年の千住1式）に位置づけられている〔永田ほか二〇一三〕。また、佐賀市尼寺一本松遺跡では橋口KⅣc式のSJ七〇二六甕棺墓から4期後半の方格規矩四神鏡Ⅲ式、SJ七〇二六甕棺墓から内行花紋鏡四葉座Ⅰ式が破砕された状態で出土している〔角編二〇一三〕。さらに、福岡県八女市茶ノ木ノ本三号甕棺墓では棺外から4期後半の方格規矩四神鏡Ⅲ式が破砕された状態で出土している。南健太郎〔二〇一〇〕はその甕棺を橋口KⅣc式としつつ、鏡は後漢中期に下る踏み返し鏡とみている。しかし、鏡の鉛同位体比は領域Aであり〔平尾・鈴木一九九六〕、かりに踏み返し鏡であったとしても領域B原料に転換する後漢中期には下りえない。このほか福岡県春日市須玖宮の下一五号甕棺墓から4期前半の雲気禽獣紋鏡ⅡA式が出土している〔平田一九九四〕。銅釧や鉄剣などがともない、「弥生後期前半」という。福岡平野の中心地だけに、甕棺型式などの詳報が待たれる。

桜馬場甕棺墓の再発掘に先立つ一九九〇年、福岡市飯氏七号甕棺墓から4期後半の内行花紋鏡四葉座Ⅰ式が出土し、宮井善朗〔一九九四〕は次のように報告する。飯氏七号甕棺は類例の少ない形だが、突帯の位置と形からみて糸島地方特有の神在遺跡三号甕棺（KⅤa式）より先行し、高三潴式新段階の甕をともなう糸島市東太田一号甕棺や三津永田一〇四号甕棺（KⅣc式）よりわずかに新しい特徴があることから、「後期前半よりやや下がる下大隈式古段階（後期中頃）」に位置づけられ、「三津永田一〇四号甕棺とほぼ同時期になる可能性が高い」という。

以上の甕棺編年と漢鏡編年との相関関係をまとめたのが表2である。これまで指摘されてきたように、甕棺編年は漢鏡編年とおおまかに相関し、それを改めて整理すると、次のようになる。

漢鏡3期後半＝立岩式甕棺（橋口KⅢc式）

漢鏡4期後半＝三津式甕棺（橋口KⅣc式）

しかし、弥生後期はじめの橋口KⅣa式甕棺に漢鏡の副葬例がなく、4期前半にあたる時期の甕棺型式がミッシングリンクになっている。しかも、4期前半の昭明鏡をもつ二塚山七六号甕棺と5期はじめの方格規矩四神鏡ⅣB式をもつ桜馬場甕棺がともに橋口KⅣb式とされ、4期後半鏡をもつ三津永田一〇四号・飯氏七号甕棺とは型式が逆転している。北部九州の弥生後期には甕棺墓が衰退し、甕棺の形が多様化するため、その編年と漢鏡編年との細かい相関関係は今後の検討課題であろう。

弥生後期中葉以後、漢鏡を用いた実年代論は俎上に載らないが、内行花紋鏡に日常土器や祭祀土器のともなう例がいくつか報告されている。福岡市那珂遺跡群の第六九次調査において「弥生時代後期中頃」の竪穴住居址SC〇四一床面に開口する土坑SP一〇一から内行花紋鏡四葉座Ⅱ式の内区破片が廃棄された状態で出土した〔長家編二〇〇四〕。報告者はそれを飯氏七号甕棺墓とほぼ同時期（＝下大隈式古段階）とみている。また、ここから御笠川を少しさかのぼった福岡市仲島遺跡では、二〇一七年の第5次調査で「弥生時代後期中頃」の土器包含層の直下から完形の内行花紋鏡蝙蝠座Ⅰ式が出土し、河川際でおこなわれた祭祀遺構と考えられている〔池田ほか二〇一八〕。鏡は一世紀末の6期前半に位置づけられ、土器の詳報が待たれる。福岡平野の中枢部において漢鏡が河辺の祭祀に用いられたことも鏡の性格を考えるうえで重要であろう。

唐津市中原遺跡では二〇〇一～〇五年に三基の墳丘墓が発掘され〔小松編二〇一二〕、そのうちST一三四一四墓の主体部から内行花紋鏡四葉座Ⅲ式一面、ST一三四一五墓の主体部から同Ⅳ式二面、その周溝内埋葬から方格規矩四神鏡VC式一面が出土し（図4）、いずれも意図的

表２　北部九州における漢鏡と弥生土器の共伴関係

遺跡	漢鏡	漢鏡編年		甕棺型式	土器型式
佐賀県二塚山 15 号甕棺墓	異体字銘帯鏡Ⅲ式	３期	後半	立岩式（ＫⅢｃ式）	
福岡県立岩 10 号甕棺墓	異体字銘帯鏡Ⅱ～Ⅳ式				
佐賀県二塚山 76 号甕棺墓	異体字銘帯鏡Ｖ式	４期	前半	三津式（ＫⅣｂ式）	
佐賀県丁永６区 SJ06 甕棺墓	異体字銘帯鏡Ｖ式			三津式（千住１式）	
佐賀県三津永田 104 号甕棺墓	獣帯鏡Ⅲ式		後半	三津式（ＫⅣｃ式）	
福岡県茶ノ木ノ本３号甕棺墓	方格規矩四神鏡Ⅲ式			ＫⅣｃ式	
佐賀県尼寺一本松 SJ7026 甕棺墓	方格規矩四神鏡Ⅲ式			ＫⅣｃ式	
福岡県飯氏７号甕棺墓	内行花紋鏡四葉座Ⅰ式			ＫⅣｃ式	
佐賀県尼寺一本松 SJ7007 甕棺墓	内行花紋鏡四葉座Ⅰ式			ＫⅣｃ式	
佐賀県桜馬場甕棺墓	方格規矩四神鏡Ⅲ式 方格規矩四神鏡ⅣＢ式 内行花紋鏡四葉座Ⅰ式	５期	前半	村徳永３式（ＫⅣｂ式）	
福岡県那珂遺跡群 SC041 住居址	内行花紋鏡四葉座Ⅱ式				下大隈式古段階
佐賀県中原遺跡 ST13414 墳丘墓	内行花紋鏡四葉座Ⅲ式		後半		惣座０式
佐賀県中原遺跡 ST13415 墳丘墓	内行花紋鏡四葉座Ⅳ式×２ 方格規矩四神鏡ＶＣ式				惣座１式
福岡県仲島遺跡第５次祭祀遺構	内行花紋鏡蝙蝠座Ⅰ式	６期	前半		下大隈式？
福岡県三雲寺口２号石棺墓	内行花紋鏡蝙蝠座Ⅰ式				下大隈式新段階／惣座１式

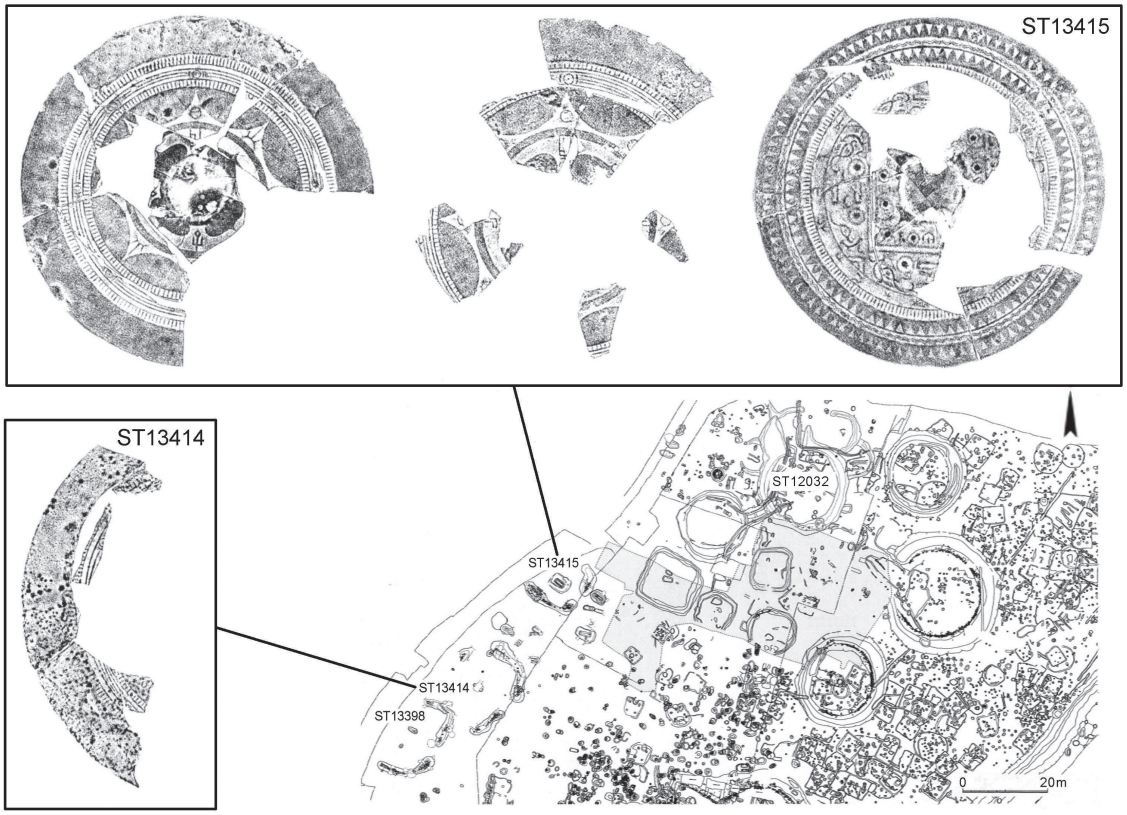

図４　唐津市中原遺跡と出土漢鏡〔小松編 2012：図 11・91・93・96・98 を合成〕

に鏡を破砕して副葬していた。周溝から出土した高坏形土器は、ＳＴ一三四一四墓が蒲原〔二〇〇三〕編年の惣座０式、ＳＴ一三四一五墓が惣座１式とされる。惣座０式は下大隈式新段階から西新町式古段階に、惣座１式は西新町式古段階にそれぞれ併行する。同じ唐津市所在の桜馬場甕棺に関する上述の蒲原編年とこの調査成果をもとに、内行花紋鏡編年との対応関係を整理すると、次のようになる。

四葉座Ⅰ式＝桜馬場甕棺〃村徳永３式甕棺
四葉座Ⅱ式＝那珂ＳＣ〇四一〃下大隈式古段階
四葉座Ⅲ式＝中原ＳＴ一三四一四墓＝惣座０式
四葉座Ⅳ式＝中原ＳＴ一三四一五墓＝惣座１式

蒲原編年では村徳永３式と惣座０式の間に千住１式・同２式が設定されている。それはちょうど四葉座Ⅱ式に対応する時期であるから、ここでは福岡平野の那珂ＳＣ〇四一例を補った。そうすると、四葉座の四型式と北部九州の土器編年とは齟齬もなく相関している。四葉座Ⅰ式は新莽期、同Ⅲ式は六四年に定点があるから、およそⅠ・Ⅱ式は一世紀前半、Ⅲ・Ⅳ式は一世紀後半の制作であり、各遺跡の実年代が推定できる。蒲原編年ではこの後に惣座２式・夕ヶ里式とつづき、唐津平野では夕ヶ里式（〃布留０式）の時期に中原ＳＴ一二〇三二や久里双水古墳などの前方後円墳が出現したとされる〔小松編二〇一二〕。

ところが、こうした土器編年が時代区分のどの時期にあたるのかをめぐっては異論がある。かねてより西新町式は弥生最後の土器型式とされてきたが、柳田康雄〔一九八二〕は西新町式〃庄内式として弥生時代ではなく古墳時代とみなしたうえで、高三潴式・下大隈式の二時期を前半・中頃・後半・終末の四時期に細分する。たとえば、６期前半の内行花紋鏡蝙蝠座Ⅰ式が出土した福岡県三雲寺口二号石棺墓は、西側溝から祭祀土器群が出土し、柳田はそれを弥生終末期の指標にしたが、従前の土器編年では下大隈式新段階にあたる（その土器群は中原ＳＴ一三四一五墓＝惣座１式併行期とみる説〔小松編二〇一二：二四八頁〕もある）。また、平原一号墓からは時期決定に有効な土器がほとんど出土していないが、柳田は造墓の時期を同じ弥生末期に位置づけている（柳田一九八二では三世紀前半、柳田二〇一二では二世紀後葉）。しかし、平原一号墓の方格規矩四神鏡の下限はＶＢ式で、中原ＳＴ一三四一五墓出土のＶＣ式より一型式古く、平原一号墓は中原ＳＴ一三四一四墓＝惣座０式（〃下大隈式新段階～西新町式古段階）期と推測されるから、相対編年としては筆者説と柳田説とは大差ないことになる。両墓ともに鏡を破砕副葬し、方形周溝墓〃墳丘墓という墓の形態も近いが、平原一号墓＝弥生末期という年代観だけが独り歩きしているのが現状である。

（２）中四国以東における弥生後期の実年代

中四国以東の地域では、弥生墓から漢鏡が出土することはほとんどなく、大阪府亀井遺跡・瓜破遺跡・巨摩廃寺下層などから出土した新莽期の貨泉をもとに、弥生後期前葉は紀元後一世紀前半に比定されてきた〔森岡一九八五〕。地域ごとの土器編年を整理した濱田延充〔二〇〇六〕も、近畿地方の後期初頭は讃岐・吉備の後期初頭と同時期で、北部九州の後期前葉（＝高三潴式新段階）と接点があること、岡山県高塚・鳥取県青谷上寺地・大阪府亀井遺跡など「出土時期が限定できる貨泉は、いずれも後期初頭の土器と共伴」していることから、近畿・瀬戸内・山陰地方における弥生後期のはじまりは一世紀前半としている。

また、名古屋市高蔵遺跡では弥生後期前葉（＝山中Ⅰ式第１段階）の土坑ＳＫ四四から４期前半の雲気禽獣紋鏡片が出土し〔村木編二〇〇三〕、

岐阜市瑞龍寺山山頂墓第2主体では弥生後期中葉（山中Ⅰ式第3段階）の土器にともなって4期後半の内行花紋鏡四葉座Ⅰ式が採集されている〔赤塚二〇〇四〕。わずか二例にすぎないが、濃尾平野では漢鏡編年と土器編年とが矛盾なく相関している。

ちなみに国立歴史民俗博物館などによる奈良県唐古・鍵遺跡の大和Ⅴ1様式（弥生後期初頭）の炭素一四年代は二〇〇〇ＢＰ〔春成ほか二〇一一〕であり、貨泉や漢鏡による年代観ともほぼ整合している。

（3）弥生後期青銅器の画一的な領域a原料

弥生青銅器の鉛同位体比は、弥生後期に大きく変化する。すなわち、弥生中期後半の扁平鈕式銅鐸は領域Ａ内に広く分布するのに対して、弥生後期の近畿式・三遠式銅鐸（近畿式＝九個、三遠式＝九個）は領域Ａの中央付近のごく狭い領域ａ（$^{207}Pb/^{206}Pb = 0.8763 \pm 0.0008$）に集中している。このことから、それは華北の同一鉱山に由来する「規格品の原料」が用いられたと考えられた〔馬淵・平尾一九八二〕。難波洋三〔二〇一九〕も鉛同位体比の分析されている突線鈕2式の近畿式・三遠式銅鐸は七器すべて、北部九州で鋳造された広形銅矛三九本のうち三七本が領域ａに入ることから、画一的な原料が北部九州から近畿・東海地方まで大量に流入したと推測している。

この領域ａ原料の出現年代について難波洋三〔二〇一二ｂ〕は、扁平鈕式新段階と考えられる土製銅鐸鋳型外枠が奈良県唐古・鍵遺跡において弥生後期初頭まで用いられていたことから、突線鈕式銅鐸の出現を弥生後期前半、領域ａ原料の流入と近畿式・三遠式銅鐸の成立を弥生後期中頃前後に想定している。しかし、唐古・鍵遺跡の発掘報告によれば、鋳造関連遺物の出土した南地区の溝は中期後半（第四様式）から後期初頭の弥生土器を包含し、鋳型などは後期初頭に廃棄されたと考えられている〔藤田一九九七〕。それが扁平鈕式銅鐸の鋳型であったとしても、中期後半から後期初頭までの時間幅をもつ地層の出土であるため、この一例をもって銅鐸各型式の鋳造年代を決めるのは妥当ではない。

これに対して岡山市高塚遺跡フロヤ調査区では、弥生後期Ⅰ（＝上東・鬼川市Ⅰ式）土器をともなう突線鈕2式（近畿式）銅鐸の埋納坑が発見されている。この銅鐸の鉛同位体比は領域ａに位置し、近くの袋状土坑一八からは貨泉二五枚が一括出土している。報告者は埋納坑内の土器や「周辺の遺構の年代観から判断して」〔岡山県二〇〇〇：一二九頁〕、それを貨泉埋蔵土坑と同時期とみている。さらに「高塚銅鐸は『見る銅鐸』のわりには表面の研磨などはみられず、鋳造後の調整は粗雑」〔同一〇一二頁〕で、「鋳造後あまり時を経ずに埋納された」〔同一〇一五頁〕と報告者はいう。そうであれば、高塚銅鐸は弥生後期はじめごろに鋳造され、ほどなくして埋納されたことになる。

また、愛知県朝日遺跡では南居住域の環濠ＳＤ一七と方形周溝墓ＳＺ一六二の間から突線鈕1式銅鐸の埋納坑が発見され、銅鐸内と埋納坑内の土器は弥生中期後葉、環濠と方形周溝墓の掘削は弥生後期であり、とくに環濠は銅鐸埋納坑を避けるように掘削されている〔石黒編一九九一〕。このため、その埋納は弥生中期末・後期初頭であり、つづく突線鈕2式銅鐸は弥生後期はじめごろに位置づけるのが妥当であろう。

一方、北部九州の広形銅矛は、対馬では塔ノ首三号石棺墓や木坂一号石棺墓などに副葬され、共伴土器から高三潴式新段階から西新（町）式まで使用されたと考えられている〔武末一九八二〕。また、北九州市重留遺跡では第2地点一号竪穴住居址内の埋納坑から新段階の広形銅矛が出土し、共伴土器は高三潴式新段階～下大隈式とされる〔原田編

二〇一六〕。それは住居内で複数回の埋納が繰り返されたから、一定の使用期間が想定される。これらをもとに北島大輔〔二〇一一〕は、柳田編年の後期2式（弥生後期初頭～前半）までの鉛同位体比は領域Aで、後期3式（≒高三潴式新段階＝弥生後期中頃）に領域aへと変化するという。

以上のように、弥生後期青銅器の年代は土器編年と照合する形で推測されてきた。しかし、型式学的研究法を打ち立てたモンテリウス〔一九三二〕の原則論に立てば、北部九州の甕棺にともなう3期・4期の鏡のほか、高塚銅鐸と朝日銅鐸は埋納坑内の出土土器と同時に埋められた「一括遺物」であるが、地層・住居址・墳丘墓などの出土土器に「共伴」する漢鏡や銅鐸などは同時の埋没ではなく、その同時性は保証の限りではない。日本では精緻な土器編年が組み立てられ、本稿では新たに内行花紋鏡と北部九州弥生後期土器との相関関係を確かめたものの、「一括遺物」による検証が十分ではないところに問題がのこされている。

しかし、領域a原料は中国からの輸入品であるため、あえて弥生土器編年を介在させる必要はないと考える。すなわち、王莽の督造した方格規矩四神鏡ⅣA式の鉛同位体比は領域aの近くに分布し（図5）、同一鉱山の原料を用いた可能性が高いこと、そうした官制の王莽鏡と比べても領域aのまとまりは特異であり、きわめて限定的な鉱床に由来すると考えられること、それが弥生後期の百数十年にわたって継続的に輸入されたというよりも、ごく短期間のうちにまとめてもたらされたと考えられること、5期前半に鉛同位体比は領域Aから領域Bに転換するから、領域A内の領域a原料が一世紀後半以降に流通していた可能性は低いこと、楽浪郡の市場には流通しない王莽鏡が大阪府紫金山古墳や岐阜県美濃観音寺山古墳から出土していること、西暦五年の王莽の上奏文に「（王）太后統を秉ること数年、恩沢洋溢し、和気四塞す。絶域の殊俗、

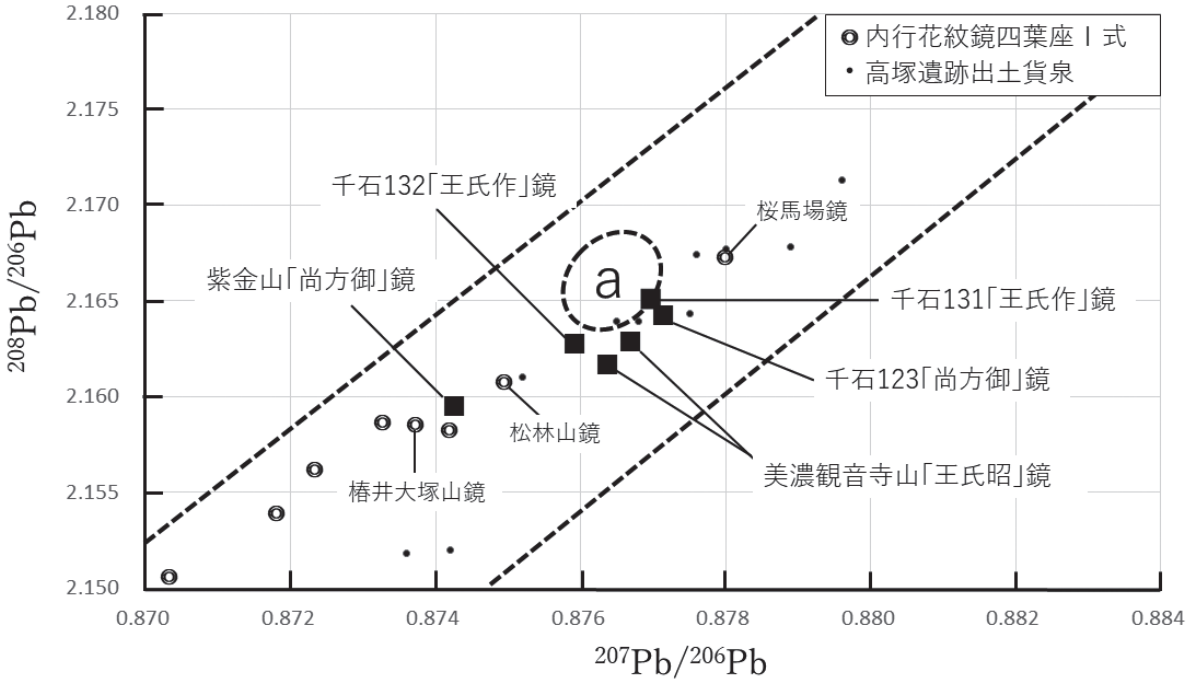

図5　「尚方御」鏡と「王氏作（昭）」鏡の鉛同位体比A式図（領域a付近拡大図）〔岡村 2021：図4〕

義を慕はざるなし。越裳氏重訳して白雉を献じ、黄支三万里より生犀を貢じ、東夷王大海を渡りて国珍を奉じ、……」（『漢書』王莽伝上）とあり、東夷諸族の中で海を渡って朝貢した「東夷王」は日本列島の倭人であった可能性が高いことから、弥生後期青銅器に用いられた領域a原料は、紫金山や美濃観音寺山の王莽鏡にともなって王莽から特別に贈与されたものと推測される〔岡村二〇二一〕。つまり、領域a原料は王莽期（＝漢鏡4期後半）にまとめて日本列島にもたらされたと考えられる。

しかも、銅鐸はこの段階に「聞く銅鐸」から近畿式・三遠式の「見る銅鐸」へと巨大化し〔田中一九七〇〕、北部九州の銅矛も中広形から広形へと大型化した。難波〔二〇一二b〕の推算によると、広形銅矛の平均的重量は約二・八キロ、全高六五センチの近畿式銅鐸のそれは約一〇キロになるという。原料が潤沢にあったからこそ、こうした青銅祭器の大型化が実現されたのであろう。中国から輸入された領域a原料は、鉛だけの単体インゴットであったのか、銅を主成分とする合金インゴットであったのかはともかく、それら青銅器原料は相当に膨大な量であったと想像される。それでは、そのころの倭人社会はどのようであったのか、漢鏡と弥生青銅器の動態から検討してみよう。

五　日本出土漢鏡の地域動態

（1）漢鏡と弥生青銅器の編年

かつて筆者は日本列島から出土する漢鏡を時期ごとに整理した〔岡村一九八六・一九九九、以下「前稿」という〕。本稿では漢鏡5期までを対象に地域動態を検討する。前節では4期後半に王莽鏡や大量の領域a原料がもたらされたと考えたから、4期を前後の二時期に分ける。すなわち、

表3　漢鏡と弥生青銅器の編年

<table>
<tr><th>漢鏡</th><th>弥生年代</th><th>鉛同位体比</th><th>北部九州</th><th>山陰</th><th>北四国</th><th>近畿</th><th>東海</th></tr>
<tr><td>3期後半</td><td>中期後葉</td><td rowspan="2">領域A</td><td>中細形銅矛</td><td rowspan="2">中細形銅剣</td><td rowspan="2">平形銅剣</td><td colspan="2">扁平鈕式銅鐸</td></tr>
<tr><td>4期前半</td><td rowspan="2">後期前葉</td><td>中広形銅矛</td><td colspan="2">突線鈕1式銅鐸</td></tr>
<tr><td>4期後半</td><td rowspan="3">領域a</td><td rowspan="3">広形銅矛</td><td rowspan="3"></td><td rowspan="3"></td><td rowspan="3">近畿式銅鐸</td><td rowspan="3">三遠式銅鐸</td></tr>
<tr><td>5期前半</td><td rowspan="2">後期中葉</td></tr>
<tr><td>5期後半</td></tr>
</table>

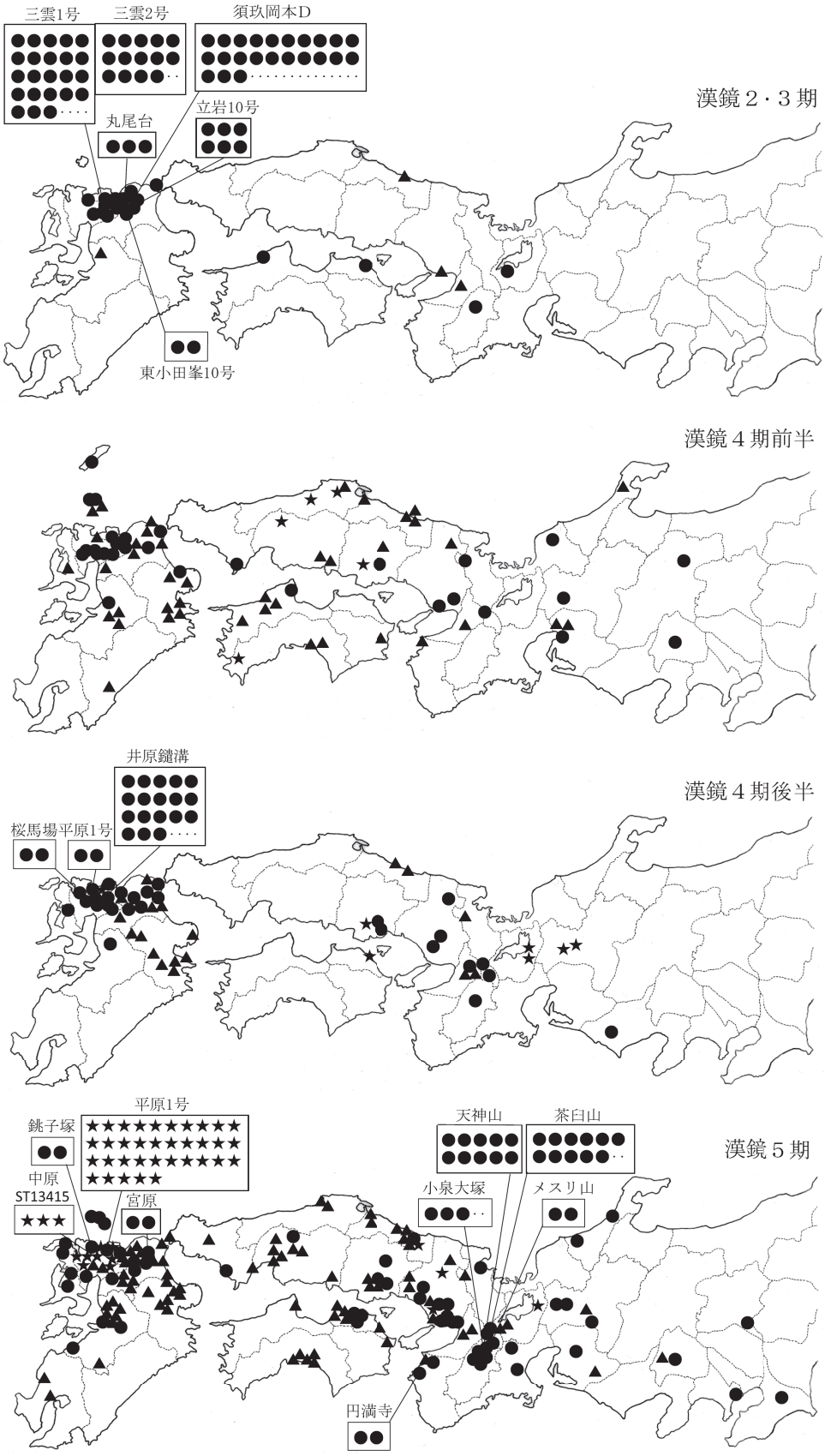

図６　２・３期～５期鏡の分布（▲は破鏡、★は破砕鏡）

表４　日本出土の２～３期鏡（▲は破鏡）

都府県	市町村	遺跡名	遺構	時期	鏡種	型式	径	状態	備考	下垣集成
福岡	福岡市	有田	ST001 甕棺墓	K Ⅲ c 式	昭明鏡	Ⅲ式	7.6			福岡 607
		吉武樋渡	62 号甕棺墓	K Ⅲ c 式	日光鏡	Ⅲ式	8.6		鉛領域Ａ	福岡 173
		丸尾台	甕棺墓？	弥生中期末	日光鏡	Ⅲ式	5.0		鉛領域Ａ	福岡 180-182
					日光鏡	Ⅲ式	5.0			
					日光鏡	Ⅲ式	5.0			
	糸島市	三雲南小路	１号甕棺墓	K Ⅲ c 式	重圏彩画鏡 1		27.3		鉛ラインＤ	福岡 21-54
					羽状地紋鏡 2		19.3		鉛領域Ａ	
					連弧紋銘帯鏡 3	Ⅲ式	16.4		鉛ラインＤ	
					連弧紋銘帯鏡 4	Ⅲ式	18.2			
					連弧紋銘帯鏡 5	Ⅲ式	16.4		鉛ラインＤ？	
					連弧紋銘帯鏡 6	Ⅲ式	18		鉛ラインＤ	
					連弧紋銘帯鏡 7	Ⅲ式	18.8		鉛領域Ａ	
					連弧紋銘帯鏡 8	Ⅲ式			鉛領域Ａ	
					連弧紋銘帯鏡 9	Ⅲ式	16.4			
					連弧紋銘帯鏡 10	Ⅲ式	16.4			
					連弧紋銘帯鏡 11	Ⅲ式	16.4			
					連弧紋銘帯鏡 12	Ⅲ式				
					連弧紋銘帯鏡 13	Ⅲ式	17			
					連弧紋銘帯鏡 14	Ⅲ式	18		鉛ラインＤ	
					連弧紋銘帯鏡 15	Ⅲ式	16.7			
					連弧紋銘帯鏡 16	Ⅲ式				
					連弧紋銘帯鏡 17	Ⅲ式				
					連弧紋銘帯鏡 18	Ⅲ式				
					重圏銘帯鏡 19	Ⅰ式	18		鉛領域Ａ	
					重圏銘帯鏡 20	Ⅲ式	16			
					重圏銘帯鏡 21	Ⅲ式			鉛領域Ａ	
					重圏銘帯鏡 22	Ⅲ式	16			
					重圏銘帯鏡 23	Ⅲ式	16.3			
					重圏銘帯鏡 24	Ⅲ式	16			
			２号甕棺墓	K Ⅲ c 式	星雲紋鏡 1		7.4		鉛領域Ａ	福岡 55-76
					昭明鏡 2	Ⅲ式	8.3		鉛ラインＤ	
					昭明鏡 3	Ⅲ式	8.3			
					昭明鏡 4	Ⅲ式	8.0			
					昭明鏡 5	Ⅲ式	6.2			
					重圏昭明鏡 6	Ⅲ式	11.4			
					日光鏡 7	Ⅲ式	7.6			
					日光鏡 8	Ⅲ式	6.4			
					日光鏡 9	Ⅲ式	6.5		鉛領域Ａ	
					日光鏡 10	Ⅲ式	7.2			
					日光鏡 11	Ⅲ式	7.4			
					日光鏡 12	Ⅲ式	7.6			
					日光鏡 13	Ⅲ式	6.5			
					日光鏡 14	Ⅲ式	6.4			
		平原５号墓	採集		日光鏡？					福岡 104
	春日市	須玖岡本Ｂ地点	採集		日光鏡	Ⅲ式	7.9			福岡 256
		須玖岡本Ｄ地点	採集		草葉紋鏡	Ⅰ式	23.6		鉛領域Ａ	福岡 261-281.10
					草葉紋鏡	Ⅰ式	23.0		鉛領域Ａ	
					草葉紋鏡	ⅡＡ式	23.6			

都府県	市町村	遺跡名	遺構	時期	鏡種	型式	径	状態	備考	下垣集成
福岡	春日市	須玖岡本 D 地点	採集		連弧紋銘帯鏡	Ⅲ式	17.3		鉛領域 A	福岡 261-281.10
					連弧紋銘帯鏡	Ⅲ式				
					連弧紋銘帯鏡	Ⅲ式	16.7			
					連弧紋銘帯鏡	Ⅲ式				
					連弧紋銘帯鏡	Ⅲ式				
					重圏銘帯鏡	Ⅱ式	17.2			
					重圏銘帯鏡	Ⅲ式	17.2		鉛領域 A	
					重圏銘帯鏡	Ⅲ式	17.2			
					重圏銘帯鏡	Ⅲ式	9.8			
					重圏銘帯鏡	Ⅲ式				
					重圏銘帯鏡	Ⅲ式	15.2			
					重圏銘帯鏡	Ⅲ式				
					日光鏡	Ⅲ式	7.6		鉛領域 A	
					日光鏡	Ⅲ式				
					星雲紋鏡	Ⅱ式	15.9		鉛領域 A	
					星雲紋鏡	Ⅱ式	15.9			
					星雲紋鏡					
					星雲紋鏡					
					星雲紋鏡	Ⅱ式	15.9		鉛領域 A	
					星雲紋鏡	Ⅱ式	17.1			
	筑紫野市	二日市峯	甕棺墓		星雲紋鏡	Ⅱ式	10.3			福岡 208
		隈・西小田 13 地点	23 号甕棺墓	K Ⅲ式	重圏銘帯鏡	Ⅲ式	9.9		鉛領域 A	福岡 305
	筑前町	東小田峯	10 号甕棺墓	K Ⅲ式	連弧紋銘帯鏡	Ⅲ式	17.2		鉛領域 A	福岡 618
					日光鏡	Ⅲ式	6.6		鉛領域 A	福岡 619
		東小田峯	甕棺墓		連弧紋銘帯鏡	Ⅲ式	9.0			福岡 430
	朝倉市	平塚字栗山			連弧紋銘帯鏡	Ⅲ式	9.6			福岡 442
	飯塚市	立岩堀田	10 号甕棺墓	K Ⅲ c 式	連弧紋銘帯鏡 1	Ⅳ式	15.6			福岡 377-382
					重圏銘帯鏡 2	Ⅲ式	17.8			
					重圏銘帯鏡 3	Ⅱ式	15.4			
					連弧紋銘帯鏡 4	Ⅲ式	18.2		鉛領域 A	
					連弧紋銘帯鏡 5	Ⅲ式	18.0			
					重圏銘帯鏡 6	Ⅱ式	15.9			
			28 号甕棺墓	K Ⅲ c 式	重圏銘帯鏡	Ⅲ式	9.8			福岡 383
			34 号甕棺墓	K Ⅲ c 式	日光鏡	Ⅲ式	4.9			福岡 384
			35 号甕棺墓	K Ⅲ c 式	連弧紋銘帯鏡	Ⅲ式	18.1			福岡 385
			39 号甕棺墓	K Ⅲ c 式	日光鏡	Ⅲ式	7.2			福岡 386
佐賀	唐津市	田島	6 号甕棺墓	K Ⅲ c 式	日光鏡	Ⅲ式	6.9			佐賀 147
	みやき町	六ノ幡	29 号甕棺墓	K Ⅲ c ～Ⅳ a 式	昭明鏡	Ⅲ式	11.9			佐賀 12
	吉野ヶ里町	二塚山	15 号甕棺墓	K Ⅲ c 式	連弧紋銘帯鏡	Ⅲ式	15.9		鉛領域 A	佐賀 30
		吉野ヶ里	SJ2775 甕棺墓	K Ⅲ c 式	日光鏡	Ⅲ式	7.0			佐賀 53-2
長崎	対馬市	下ガヤノキ F 地点	箱式石棺墓		連弧紋銘帯鏡	Ⅲ式	17.7			長崎 4-6
熊本	玉名市	大原 1-3 区	SI3 住居址	弥生後期	連弧紋銘帯鏡	Ⅲ式		▲		熊本 6-1
愛媛	松山市	若草町	SK3 土坑	弥生中後期	重圏日光鏡	Ⅲ式	8.4	破片		愛媛 35
香川	高松市	石清尾山猫塚古墳	竪穴式石室？	古墳前期	連弧紋銘帯鏡	Ⅲ式	16.7		鉛領域 A	香川 40
山口	下関市	稗田地蔵堂	箱式石棺墓		連弧紋銘帯鏡	Ⅲ式	14.9			山口 56
鳥取	鳥取市	青谷上寺地	溝 SD33-1	弥生末期	星雲紋鏡		6.9	▲		鳥取 29-1
兵庫	神戸市	森北町	包含層	弥生後期	重圏銘帯鏡	Ⅲ式		▲		兵庫 1
大阪	大阪市	瓜破北	包含層	弥生後期	銘帯鏡	Ⅲ式		▲		大阪 113
奈良	田原本町	清水風	包含層	弥生中期	日光鏡	Ⅲ式	6.7	破片		奈良 165-2
滋賀	栗東市	下鈎	溝 3	古墳前期	昭明鏡	Ⅲ式	8	破片		滋賀 37-3

表５　日本出土の４期前半鏡（▲は破鏡、★は破砕鏡）

都府県	市町村	遺跡名	遺構	時期	鏡種	型式	径	状態	備考	下垣集成
福岡	福岡市	飯森谷Ｂ	方形周溝墓	古墳初頭	方格規矩鏡	Ⅱ式		破片		福岡 174
	糸島市	井原鑓溝	甕棺墓？	弥生後期	方格規矩鏡１	Ⅱ式	13.9	破片		福岡 102
	春日市	平原１号墓	割竹形木棺	弥生後期	雲気禽獣紋鏡	Ⅰ式	16.5		鉛領域Ａ	福岡 143
		須玖唐梨	第９層	弥生後期			10.0	▲２孔		福岡 303
		須玖宮の下	15 号甕棺墓	弥生後期前半	雲気禽獣紋鏡	ⅡＡ式		破片		1993 年実見
		小倉立石	甕棺墓？	弥生	獣帯鏡	Ⅰ式		破片	鉛領域Ａ	福岡 241.286
	中間市	八つ広	箱式石棺？		雲気禽獣紋鏡	Ⅱ式	10.4		鉛領域Ａ	福岡 418
	北九州市	南方浦山古墳	箱式石棺	古墳前期	雲気禽獣紋鏡	ⅡＢ式	9.6		鉛領域Ａ	福岡 518-1
		長野小西田	旧河川	弥生～古墳初	雲気禽獣紋鏡	ⅡＡ式	10.0	▲		福岡 647-1
	みやこ町	徳永川ノ上２号墳丘墓	１号棺	弥生末期	方格規矩鏡	Ⅱ式	13.5	▲	鉛領域Ａ	福岡 660
	大任町	柿原	箱式石棺墓	弥生後期	八禽鏡	Ｂ式	8.8			福岡 650
	みやま市	藤の尾垣添	１号溝	弥生～古墳初	昭明鏡？		11.9	▲１孔	鉛領域Ａ	福岡 483-1
佐賀	唐津市	天神ノ元	包含層		？		8.4	▲		佐賀 138-2
	神埼市	志波屋	箱式石棺	弥生	昭明鏡	Ⅴ式	9.6			佐賀 57
			甕棺墓？		雲気禽獣紋鏡	ⅡＡ式	11.0		鉛領域Ａ	佐賀 55
		城原三本谷北	箱式石棺		方格規矩鏡	Ⅱ式？	10	▲３孔		佐賀 63
	吉野ヶ里町	二塚山	76 号甕棺墓	ＫⅣ式	昭明鏡	Ⅴ式	9.2	★	鉛領域Ａ	佐賀 28
			29 号土坑墓	弥生	獣帯鏡	Ⅱ式	13.6		鉛領域Ｂ	佐賀 29
		石動四本松	32 号甕棺墓	弥生	昭明鏡	Ⅴ式	12.6	★	鉛領域Ａ	佐賀 197
		三津永田	石蓋甕棺墓	ＫⅣ式	昭明鏡	Ⅴ式	9.0			佐賀 41
			115 号甕棺墓	ＫⅣ式	雲気禽獣紋鏡	ⅡＢ式	9.2	★		佐賀 40
	佐賀市	七ヶ瀬３区	SJ3153 甕棺墓		昭明鏡	Ⅴ式	9.5	★		市速報展 2021
			SC3062 石棺墓		獣帯鏡	Ⅰ式	12	★		
		白石原	SJ30160 甕棺墓	弥生後期後半	雲気禽獣紋鏡	Ⅱ式？	10	▲２孔		佐賀市報 70
		修理田	SX2024	弥生後期後半	？		8.8	▲		佐賀 192
	小城市	丁永６区	SJ06 甕棺墓	ＫⅣ式	昭明鏡	Ⅴ式		★		佐賀 106-3
	武雄市	椛島山	箱式石棺	弥生	昭明鏡	Ⅴ式	10.4		鉛領域Ａ	佐賀 178
		六ノ角（武雄小学校）	？	？	雲気禽獣紋鏡	Ⅱ式	6.4	▲		佐賀 167
		みやこⅥ区	下層	弥生	雲気禽獣紋鏡	Ⅱ式	12		鉛領域Ａ	佐賀 174
	白石町	湯崎東 E3 区	包含層	弥生末～古墳	昭明鏡？			▲		佐賀 181
長崎	対馬市	エーガ崎	箱式石棺墓？	弥生	昭明鏡	Ⅴ式	12.5			長崎 13
	壱岐市	原の辻高元ⅡＣ区	3b 層	弥生中期	昭明鏡	Ⅴ式		▲		壱岐市報 14
		原の辻大川地区	採集		昭明鏡	Ⅴ式	9.7	▲		
		原の辻大原 344 区	甕棺墓？	弥生後期	昭明鏡	Ⅴ式	8.8	▲		
		原の辻大川地区	採集		方格規矩鏡	Ⅱ式	10.4			長崎 40
		原の辻石田大原	包含層		雲気禽獣紋鏡		11.8			長崎 76-6
	大村市	立小路	第３層		昭明鏡？			▲１孔		長崎県報 216
熊本	熊本市	新御堂Ⅳｂ区	63 号住居址	弥生後期	昭明鏡？					城南町報 13
	南阿蘇村	西一丁畑	包含層	弥生後期	方格規矩鏡	Ⅱ式？		▲		熊本 43
	嘉島町	二子塚	SB86 住居址	弥生後期	？		11.2	▲		熊本 63
	山都町	北中島西原	１号住居址	弥生末期	昭明鏡	Ⅴ式	9.2	▲１孔		熊本 70-1
大分	宇佐市	川部１号方形周溝墓	中心主体２号石棺	弥生末期	八禽鏡	Ａ式	9.6			大分 89
		大平	２号石棺墓	弥生～古墳初	八禽鏡		9.4	▲１孔		大分 21
	杵築市	古城得	20 号住居址	弥生～古墳初	雲気禽獣紋鏡	ⅡＡ式		▲		
	大分市	守岡Ⅱ区	１号住居址	弥生末期	昭明鏡	Ⅴ式	9.5	▲		大分 36
		地蔵原	住居址	弥生後期	昭明鏡	Ⅴ式		▲		大分 44
	豊後大野市	松木	27 号住居址	弥生後期後半	方格規矩鏡？	Ⅱ式	11.4	▲		大分 61
	犬飼町	高松	16 号住居址		昭明鏡	Ⅴ式	10.2	▲１孔		大分 57
宮崎	宮崎市	下那珂	96 号住居址	弥生後期	雲気禽獣紋鏡	Ⅱ式	9.2	▲		宮崎 125-2

都府県	市町村	遺跡名	遺構	時期	鏡種	型式	径	状態	備考	下垣集成
愛媛	松山市	文京 10 次	包含層	弥生中後期	？			▲		愛媛 38
		北条大相院 5 区	自然流路	弥生～古墳初	？			▲		愛媛 90-3
	砥部町	水満田	包含層	弥生～古墳初	？		12.6	▲		愛媛 64
	西予市	坪栗	自然流路	弥生後期	昭明鏡	Ⅴ式	9	▲		愛媛 87-1
	今治市	唐子台 14 丘墓	土坑墓	弥生～古墳初	昭明鏡	Ⅴ式	12.5	摩滅		愛媛 24
高知	宿毛市	高岡山 2 号墳	礫槨	古墳前期	昭明鏡	Ⅴ式	9.4	★		高知 4
	南国市	田村 E1 区	ST102 住居址	弥生後期前半	昭明鏡？		8.4	▲	鉛領域 A	高知 8
	香南市	北地	竪穴住居 ST1	弥生後期中葉	？		10.2	▲		高知 1-1
徳島	徳島市	庄・蔵本	包含層	弥生末期	昭明鏡	Ⅴ式	9.4	▲ 1 孔		徳島 56-1
山口	田布施町	国森古墳	箱形木棺	古墳前期	昭明鏡	Ⅴ式	9.1	摩滅		山口 13
広島	北広島町	中井出勝負峠 8 号墳	墳丘頂土坑墓	古墳前期	昭明鏡	Ⅴ式	9.7	★	鉛領域 A	広島 26
	福山市	今岡	箱式石棺	古墳時代？	方格規矩鏡？	Ⅱ式？	11.1	▲		広島 64
	府中市	備後国府跡砂山地区	401T 溝第 5 層	古墳時代	方格規矩鏡？	Ⅱ式	9	▲		広島 54
島根	大田市	庵寺 1-B 号墳	箱式石棺	古墳前期	八禽鏡	B 式	9.6	★		島根 32-1
	松江市	苅捨古墳	中央粘土槨	古墳前期	雲気禽獣紋鏡		11	▲		島根 15-2
		小屋谷 3 号墳	第 1 主体部	古墳前期	雲気禽獣紋鏡	ⅡB 式	9.4	★	鉛領域 A	島根 20
岡山	総社市	鋳物師谷 1 号墓	竪穴式石室	弥生末期	雲気禽獣紋鏡	ⅡB 式	9.5	★	鉛領域 A	岡山 25
	赤磐市	用木 2 号墳	第 1 主体部	弥生末期	方格規矩鏡	Ⅱ式	9.8	摩滅		岡山 66
	津山市	外道山	採集		昭明鏡	Ⅴ式	13.6	▲		岡山 180
鳥取	鳥取市	青谷上寺地	KJA5 区①層	古墳～奈良	八禽鏡	A 式		▲		鳥取 29-2
			溝 2（SD11）	弥生後期後半	八禽鏡		9.6	▲		鳥取 29-3
		乙亥正屋敷廻 2･3 区	流路Ⅰb 層	近現代	八禽鏡	B 式	9.1	▲ 1 孔		県センター報 68
	米子市	青木 H 地区	60 号住居址	弥生後期後半	八禽鏡	A 式	8.3	▲		鳥取 104
兵庫	豊岡市	鳥居	砂層	庄内並行期？	？		9.2	▲ 2 孔	鉛領域 A	兵庫 221-1･2
	神戸市	天王山 4 号墳	割竹形木棺	古墳初期	八禽鏡	B 式	9.5	摩滅		兵庫 75
	宝塚市	（伝）万籟山古墳	竪穴式石室	古墳前期	雲気禽獣紋鏡	ⅡA 式	14.1			兵庫 48
大阪	東大阪市	池島・福万寺	167 土坑	古墳前期	？		8.9	▲ 1 孔		大阪 247
和歌山	和歌山市	滝ヶ峯	貝層上部採集	弥生後期	雲気禽獣紋鏡	ⅡB 式		▲		和歌山 23
京都	八幡市	美濃山王塚古墳	粘土床	古墳前期	方格規矩鏡	Ⅱ式	10.6			京都 167
	福知山市	狸谷 17 号墳	割竹形木棺	古墳前期	雲気禽獣紋鏡？		9.4	摩滅		京都 26
福井	福井市	花野谷 1 号墳	割竹形木棺	古墳前期	昭明鏡	Ⅴ式	10.1	2 孔	鉛領域 B	福井 49-2
石川	羽咋市	吉崎・次場	Ⅴ -8 号土坑	弥生	雲気禽獣紋鏡	ⅡB 式		▲鈕		石川 7
岐阜	岐阜市	鎌磨 1 号墳	粘土槨	古墳前期	方格規矩鏡	Ⅰ式	8.5			岐阜 74
愛知	名古屋市	高蔵	SK44	弥生後期前半	雲気禽獣紋鏡		10.8	▲	鉛領域 A	愛知 5-1
	清須市	朝日 99Ab 区	SK01	弥生後期後半	雲気禽獣紋鏡		7.4	▲ 2 孔		愛知 55-1
	東海市	（伝）兜山古墳	？	古墳前期	雲気禽獣紋鏡	ⅡA 式	9.2			愛知 67
長野	長野市	川柳将軍塚古墳	竪穴式石室	古墳前期	昭明鏡	Ⅴ式	11.7			長野 20
山梨	甲府市	大丸山古墳	竪穴式石室	古墳前期	八禽鏡	B 式	9.5			山梨 8

表６　日本出土の４期後半鏡（▲は破鏡、★は破砕鏡）

都府県	市町村	遺跡名	遺構	時期	鏡種	型式	径	状態	備考	下垣集成
福岡	福岡市	宝満尾	４号土坑墓	弥生後期	昭明鏡	VI式	10.6		鉛領域 A	福岡 199
		飯氏３次Ⅱ区	７号甕棺墓	K Ⅳ式	内行花紋鏡	四Ⅰ式	18.0			福岡 147
		野多目前田第１区	第３溝	古代以前	内行花紋鏡	四Ⅰ式	18.1	▲		福岡 198
	糸島市	井原鑓溝	甕棺墓		漢有 方格規矩鏡 2	Ⅲ式	14.0			福岡 85-101
					方格規矩鏡 3	Ⅲ式	14.1			
					方格規矩鏡 4	Ⅲ式	12.8			
					方格規矩鏡 5	Ⅲ式	13.7			
					太山 方格規矩鏡 6	Ⅲ式	14.2			
					新有 方格規矩鏡 7	Ⅲ式	14.0			
					方格規矩鏡 8	Ⅲ式	12.5			
					方格規矩鏡 9	Ⅲ式	13.6			
					漢有 方格規矩鏡 10	Ⅲ式	13.5			
					方格規矩鏡 11	Ⅲ式	13.5			
					泰言 方格規矩鏡 12	Ⅲ式	14.2			
					方格規矩鏡 13	Ⅲ式	16.3			
					方格規矩鏡 14	Ⅲ式	14.4			
					漢？有 方格規矩鏡 15	Ⅲ式	16.5			
					方格規矩鏡 16	Ⅲ式	13.9			
					方格規矩鏡 17	Ⅲ式	12.8			
					太山 方格規矩鏡 18	Ⅲ式	11.9			
					方格規矩鏡 19	Ⅲ式	12.9			
		井原ヤリミゾＤ群	１号木棺墓	弥生後期中頃	内行花紋鏡	四Ⅰ式	17	★	鉛領域 A	福岡 103-2
			７号木棺墓	弥生後期	内行花紋鏡	四Ⅰ式	12		鉛領域 A	福岡 103-3
		井原ヤリミゾＢ群	15 号木棺墓	弥生後期	内行花紋鏡	四Ⅰ式	15.7	★		糸島市報 1
		井原ヤリミゾＡ群	17 号木棺墓	弥生後期	内行花紋鏡	四Ⅰ式	15.0	★		
		平原１号墓	割竹形木棺	弥生末期	内行花紋鏡 16	四Ⅰ式	18.8	★	鉛領域 AL	福岡 105
					方格規矩鏡 40	Ⅲ式	11.7	★	鉛領域 AL	福岡 142
		井田原開古墳	不明	古墳中期	内行花紋鏡	四Ⅰ式	13.7			福岡 3
	春日市	須玖岡本Ｂ地点	甕棺墓？	弥生	方格規矩鏡	Ⅲ式	13.9			福岡 257
		松添遺跡水田遺構	洪水砂	鎌倉以降	内行花紋鏡	四Ⅰ式	11.5			福岡 614-1
	北九州市	高津尾 17 区	13 号土坑墓	弥生	方格規矩鏡	Ⅲ式	14.5	▲	鉛領域 A	福岡 576
		小倉城下屋敷跡	砂丘上面	弥生	内行花紋鏡	四Ⅰ式	15.6			福岡 645
	苅田町	石塚山古墳	竪穴式石室	古墳前期	獣帯鏡					福岡 529
	行橋市	津留	溝５	弥生末期	方格規矩鏡	Ⅲ式？		▲		福岡 655
	みやこ町	上所田	石蓋土坑墓	弥生	内行花紋鏡	四Ⅰ式	18.5	▲		福岡 589
	嘉麻市	五穀神社	箱式石棺	弥生	泰言 方格規矩鏡	Ⅲ式	14.0			福岡 391
	八女市	茶ノ木ノ本	３号甕棺墓	K Ⅳ c 式	方格規矩鏡	Ⅲ式	11.0	★	鉛領域 A	福岡 675
		亀の甲	95 号箱式石棺	弥生	方格規矩鏡	Ⅲ式	11.2	▲		福岡 477
佐賀	唐津市	桜馬場	甕棺墓	村徳永３式	方格規矩鏡	Ⅲ式	15.4			佐賀 149-150
					内行花紋鏡	四Ⅰ式	18.5			
	伊万里市	午戻	SC005 箱式石棺墓	弥生後期後半	獣帯鏡			▲		佐賀 194
	みやき町	原古賀三本谷	SK400 土坑	弥生末期	昭明鏡	VI式	10.8	▲		佐賀 19
		坊所一本谷	箱式石棺墓	弥生	内行花紋鏡	四Ⅰ式	17.0		鉛領域 A	佐賀 21

都府県	市町村	遺跡名	遺構	時期	鏡種	型式	径	状態	備考	下垣集成
佐賀	吉野ヶ里町	二塚山	26 号土坑墓	弥生	内行花紋鏡	四Ⅰ式	15.6		鉛領域 A	佐賀 32
		瀬ノ尾	SH102 住居址	弥生後期後半	方格規矩鏡	Ⅲ式	12	▲	鉛領域 A	佐賀 37
		南角（大曲）	土坑墓	弥生後期	内行花紋鏡	四Ⅰ式	14.6			佐賀 44
		三津永田	104 号甕棺墓	KⅣc 式	泰言 獣帯鏡	Ⅲ式	14.3			佐賀 39
		三津永田北方			内行花紋鏡	四Ⅰ式	15.4		鉛領域 A	佐賀 43
	佐賀市	尼寺一本松	SJ7026 甕棺墓	KⅣc 式	方格規矩鏡	Ⅲ式	11.0	★		佐賀 100-2
			SJ7007 甕棺墓	KⅣc 式	内行花紋鏡	四Ⅰ式	11.0	★		佐賀 100-1
		七ヶ瀬 3 区	SC3056 石棺墓		内行花紋鏡	四Ⅰ式	17	★		市速報展 2021
		柴尾橋下流	SD004 溝底面	弥生～古墳初	内行花紋鏡	四Ⅰ式	14.5	▲		佐賀 76
長崎	佐世保市	門前 B-10-19 区	河川跡包含層	弥生後期	昭明鏡	Ⅵ式	10			長崎県報 190
大分	大分市	尼ヶ城	住居址	弥生	方格規矩鏡？	Ⅲ式	16.5	▲2 孔		大分 34
		雄城台 7 次	1 号住居址	弥生後期	方格規矩鏡？	Ⅲ式	8.9	▲		大分 37
	臼杵市	原	3 号住居址	弥生後期後葉	方格規矩鏡	Ⅲ式？		▲1 孔		大分 55
	日田市	小迫辻原 B 区	4 号住居址	弥生～古墳初	内行花紋鏡	四Ⅰ式		▲1 孔		大分 75
		草場	箱式石棺	弥生	方格規矩鏡	Ⅲ式	12	▲		大分 74
	犬飼町	高松	36 号住居址	弥生後期後半	方格規矩鏡？	Ⅲ式	17.2	▲1 孔		大分 58
	豊後大野市	高添石五道原地区	No.56 ピット	弥生～古墳初	方格規矩鏡	Ⅲ式	9.7	▲2 孔		大分 61-3
	竹田市	小園	4 号住居址	弥生～古墳初	方格規矩鏡	Ⅲ式		▲3 孔		大分 62
熊本	菊池市	小野崎 堀の内Ⅰ区	SK-24 土坑墓？	弥生	獣帯鏡	Ⅲ式	8.9			熊本 116-1
香川	高松市	鶴尾神社 4 号墓	竪穴式石室	弥生末期	漢有 方格規矩鏡	Ⅲ式	18.2	★紐綴孔		香川 48
岡山	岡山市	矢藤治山墓	竪穴式石室	弥生末期	方格規矩鏡	Ⅲ式	16.4	★		岡山 226
		浦間茶臼山古墳	竪穴式石室	古墳前期	獣帯鏡			破片		岡山 117
	瀬戸内市	花光寺山古墳	長持形石棺	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅰ式	24.5			岡山 159
鳥取	倉吉市	高原	10 号住居址	弥生後期	方格規矩鏡？	Ⅲ式？	14	▲		鳥取 132-1
	鳥取市	里仁 36 号墳	木棺直葬？	古墳前期	方格規矩鏡？	Ⅲ式？		▲		鳥取 131-3
兵庫	豊岡市	森尾古墳	第 1 竪穴式石室	古墳前期	方格規矩鏡	Ⅲ式	13.6	摩滅		兵庫 193
	小野市	敷地大塚古墳	粘土槨？	古墳前期	方格規矩鏡	Ⅲ式	15.3	摩滅		兵庫 101
	西脇市	滝ノ上 20 号墳	竪穴式石室	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅰ式	15.1	摩滅		兵庫 107
大阪	高槻市	芥川	1 号住居址	弥生後期	方格規矩鏡	Ⅲ式	11	▲		大阪 38
	茨木市	東奈良	SD1	弥生後期～古墳	方格規矩鏡	Ⅲ式？		▲1 孔		大阪 32-1
		紫金山古墳	竪穴式石室	古墳前期	方格規矩鏡	ⅣA 式	22.8	摩滅	鉛領域 A	大阪 30
	大阪市	瓜破北 SX12 周溝	包含層	弥生後期	方格規矩鏡	Ⅲ式？		▲鈕		大阪 111
奈良	桜井市	（伝）ホケノ山古墳	石積木槨	弥生末期	内行花紋鏡	四Ⅰ式	23.2			奈良 121-1
京都	木津川市	椿井大塚山古墳	竪穴式石室	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅰ式	27.8	摩滅	鉛領域 A	京都 185
	八幡市	東車塚古墳	後円部粘土槨	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅰ式	22.3		鉛領域 B	京都 154
	福知山市	寺ノ段 2 号墳	第 5 主体木棺	古墳前期	方格規矩鏡	Ⅲ式	17.0	▲		京都 28
滋賀	長浜市	三川丸山古墳	木棺直葬	弥生末期	方格規矩鏡	Ⅲ式	11.5	★？		滋賀 78
	高月町	古保利小松古墳	盗掘坑 B	弥生末期	方格規矩鏡	Ⅲ式	14	★？		滋賀 81-2
岐阜	岐阜市	瑞龍寺山	土坑墓	弥生後期	内行花紋鏡	四Ⅰ式	22.1	★		岐阜 77
	美濃市	美濃観音寺山古墳	組合式木棺	弥生末期	方格規矩鏡	ⅣA 式	22.6	★	鉛領域 A	岐阜 110
静岡	磐田市	松林山古墳	竪穴式石室	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅰ式	22.7		鉛領域 A	静岡 31

表７　日本出土の５期鏡（▲は破鏡、★は破砕鏡）

都府県	市町村	遺跡名	遺構	時期	鏡種	型式	径	状態	備考	下垣集成
福岡	福岡市	那珂遺跡群 69 次	SC041 竪穴住居址	弥生後期中頃	内行花紋鏡	四Ⅱ式		▲	鉛領域 A	福岡 610-1
		西新町 12 次	41 号土坑	古墳前期	内行花紋鏡？	？	9.4	▲		福岡県報 154
		羽根戸南 G-3 号墳	割竹形木棺	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ式？	16	▲２孔	鉛領域 B	福岡 606
		蒲田水ヶ元	住居址柱坑	弥生～古墳	方格規矩鏡	ＶＣ式？	10.5	▲	鉛領域 A	福岡 200
		席田遺跡群大谷	包含層	弥生後期	内行花紋鏡？			▲		福岡市報 218
		日佐原Ｅ群	15 号石蓋土坑墓	弥生	内行花紋鏡	四Ⅳ式	13.5			福岡 196
	糸島市	平原１号墓	割竹形木棺	弥生末期	超大型内行花紋鏡 10		46.5	★	鉛領域 AL	福岡 106-141
					超大型内行花紋鏡 11		46.5	★	鉛領域 AL	
					超大型内行花紋鏡 12		46.5	★	鉛領域 AL	
					超大型内行花紋鏡 13		46.5	★	鉛領域 AL	
					超大型内行花紋鏡 14		46.5	★	鉛領域 AL	
					尚方佳方格規矩鏡 1	ⅣＢ式	23.4	★	鉛領域 AL	
					尚方作方格規矩鏡 2	ⅣＢ式	21	★	鉛領域 AH	
					尚方作方格規矩鏡 3	ⅣＢ式	21.0	★	鉛領域 AH	
					尚方作方格規矩鏡 4			★	鉛領域 AH	
					□□作方格規矩鏡 5	ＶＡ式	18.4	★	鉛領域 AL	
					尚方作方格規矩鏡 6	ＶＡ式	18.5	★	鉛領域 AL	
					尚方作方格規矩鏡 7	ＶＢ式	16.1	★	鉛領域 AH	
					尚方作方格規矩鏡 8			★	鉛領域 AH	
					尚方作方格規矩鏡 9			★	鉛領域 AH	
					尚方作方格規矩鏡 18	ＶＡ式	16.1	★	鉛領域 AL	
					尚方佳方格規矩鏡 19	ＶＢ式	15.9	★	鉛領域 AH	
					尚方作方格規矩鏡 20	ＶＡ式	18.5	★	鉛領域 AL	
					尚方佳方格規矩鏡 21	ⅣＢ式	20.7	★	鉛領域 AL	
					尚方作方格規矩鏡 22	ＶＡ式	18.7	★	鉛領域 AL	
					尚方作方格規矩鏡 23	ⅣＢ式	19.1	★	鉛領域 AH	
					尚方作方格規矩鏡 24	ＶＡ式	18.8	★	鉛領域 AH	
					尚方作方格規矩鏡 25			★	鉛領域 AH	
					尚方作方格規矩鏡 26			★	鉛領域 AL	
					尚方佳方格規矩鏡 27	ＶＡ式	15.8	★	鉛領域 AL	
					尚方作方格規矩鏡 28	ⅣＢ式	18.2	★	鉛領域 AL	
					尚方佳方格規矩鏡 29	ＶＡ式	16.5	★	鉛領域 AL	
					尚方佳方格規矩鏡 30	ⅣＢ式	18.9	★	鉛領域 AL	
					陶氏作方格規矩鏡 31	ＶＡ式	18.6	★	鉛領域 AH	
					陶氏作方格規矩鏡 32	ＶＡ式	18.8	★	鉛領域 AH	
					陶氏作方格規矩鏡 33			★	鉛領域 AH	
					陶氏作方格規矩鏡 34	ＶＡ式	16.6	★	鉛領域 AH	
					陶氏作方格規矩鏡 35			★	鉛領域 AH	
					陶氏作方格規矩鏡 36	ＶＢ式	16.2	★	鉛領域 AH	
					陶氏作方格規矩鏡 37	ＶＢ式	16.4	★	鉛領域 AH	
					陶氏作方格規矩鏡 38	ＶＡ式	18.8	★	鉛領域 AL	
					陶氏作方格規矩鏡 39			★	鉛領域 AH	
		一貴山銚子塚古墳	竪穴式石室	古墳前期	方格規矩鏡	ＶＡ式	21.7			福岡 5･6
					内行花紋鏡	四Ⅱ式	21.7			
		井原ヤリミゾ	６号木棺墓	弥生後期	方格規矩鏡	ＶＡ式	18.6	★	鉛領域 A	福岡 103-1
		三雲加賀石	包含層	弥生～古墳初	方格規矩鏡			▲		福岡 77
		三雲イフ	4 号石棺墓	弥生末期	内行花紋鏡	四Ⅱ式？			鉛領域 B	福岡 82
		吉井水付第五地点	包含層	弥生後期	内行花紋鏡？			▲		福岡 598
		御床松原	100 号住居址	古墳前期	内行花紋鏡		16.4	▲	鉛領域 B	福岡 4-1

都府県	市町村	遺跡名	遺構	時期	鏡種	型式	径	状態	備考	下垣集成
福岡	春日市	松添遺跡水田遺構	洪水砂	鎌倉以降	方格規矩鏡	ＶＡ式？	15.8			福岡 614-2
		天神ノ木	竪穴住居	弥生後期	内行花紋鏡	四Ⅲ式？	13.9			福岡 242-1
	大野城市	御陵６号墳	第２主体部	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ式？				福岡 282
	宗像市	稲元久保 14 号墳	割竹形木棺	古墳前期	内行花紋鏡		14.7	▲１孔		福岡 635
	北九州市	高島	１号箱式石棺墓	弥生	内行花紋鏡	四Ⅱ式		▲		福岡 587
	嘉麻市	笹原	箱式石棺墓	弥生	内行花紋鏡	四Ⅳ式	12.5			福岡 392
	宮若市	汐井掛	175 号土坑墓	弥生	内行花紋鏡		18.0	▲		福岡 412
		山口（黄金塚）			内行花紋鏡	四Ⅳ式	15.4			福岡 406
	田川市	伊加利	箱式石棺墓	弥生後期	内行花紋鏡	四Ⅳ式	18.5			福岡 550
	香春町	宮原	３号箱式石棺墓	弥生	内行花紋鏡	四Ⅳ式	19.5			福岡 554･555
					内行花紋鏡	四Ⅳ式	12.3			
	福智町	宝珠	箱式石棺墓	弥生	内行花紋鏡	四Ⅱ式	15.6			福岡 597
	豊前市	塔田琵琶田２次Ⅱ区	66 号住居址	古墳中期前半	内行花紋鏡	四Ⅲ式？		▲１孔		福岡 667
	上毛町	穴ヶ葉山	40 号石蓋土坑墓	古墳前期	内行花紋鏡		17.3	▲１孔		福岡 670
	行橋市	稲童石並	箱式石棺墓	弥生	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式		▲	鉛領域 B	福岡 562
	朝倉市	山田後山	箱式石棺墓	弥生	内行花紋鏡	四Ⅱ式？	14.9	▲１孔		福岡 433.435
		平塚川添	住居址覆土	弥生～古墳初	内行花紋鏡	四		▲		福岡 622
	筑前町	下町	15 号土坑墓	弥生後期	内行花紋鏡	円Ⅱ式	10.1	★		福岡 621
	小郡市	三沢栗原遺跡	30 号住居址	弥生後期前半	内行花紋鏡			▲		福岡 509
			43 号住居址	古墳前期	内行花紋鏡			▲２孔	鉛領域 A	福岡 508
	久留米市	日渡遺跡５次	包含層		内行花紋鏡	四Ⅳ式	12.3			福岡 674-1
佐賀	唐津市	桜馬場	甕棺墓	村徳永３式	方格規矩鏡	ⅣＢ式	23.2			佐賀 148
		中原 ST13414 墳丘墓	中心主体部	惣座０式	内行花紋鏡	四Ⅲ式	20.7	★		佐賀 187-4
		中原 ST13415 墳丘墓	中心主体部	惣座１式	内行花紋鏡１	四Ⅳ式	17.5	★		佐賀 187-5
					内行花紋鏡２	四Ⅳ式	19.0	★		佐賀 187-6
			周溝内埋葬		方格規矩鏡	ＶＣ式	18.1	★		佐賀 187-7
		中原 9-2 区	O-27 区画包含層		方格規矩鏡	Ｖ式	12.2	▲		佐賀 187-1
		半田大園Ｃ区	包含層		方格規矩鏡	Ｖ式	11.8	▲		佐賀 138-1
		神田堤	包含層		内行花紋鏡		17.9	▲		佐賀 151
		千々賀	包含層		内行花紋鏡		17.2	▲		佐賀 157-1
	鳥栖市	藤木	SC201 石蓋土坑墓	弥生後期	内行花紋鏡	四Ⅳ式	13.2	★		佐賀 199
		長ノ原	３号住居址	弥生後期後半	方格規矩鏡	Ｖ式？	14.6	▲		佐賀 4
	上峰町	五本谷	75 号土坑墓	弥生	方格規矩鏡	Ｖ式？	11.8	▲		佐賀 26
	神埼市	城原北外	採集		内行花紋鏡		20	▲		佐賀 64
	吉野ヶ里町	吉野ヶ里	SD0925 外環濠	弥生後期	内行花紋鏡		22.2	▲		佐賀 51
			SH0544 住居址	弥生後期	内行花紋鏡		16.6	▲		佐賀 54
		横田（松原）	甕棺墓？	弥生	尚方作方格規矩鏡	ＶＡ式	17.5			佐賀 36
		松葉（在川）	箱式石棺墓	弥生後期	方格規矩鏡	ＶＡ式	14.7			佐賀 33
	佐賀市	池ノ上			方格規矩鏡	ＶＡ式？	17.4			佐賀 92
		七ヶ瀬３区	SP3214 木棺墓	弥生後期	尚方作方格規矩鏡	ＶＢ式	14	★		市速報展 2021
	小城市	寄居 ST01 古墳	第１主体部	古墳初期	尚方作方格規矩鏡	ＶＡ式	17.7	★		佐賀 117
	武雄市	椛島山	箱式石棺	弥生後期	方格規矩鏡	ＶＢ式	13.1		鉛領域 B	佐賀 179
		みやこ	SP305 箱式石棺墓	弥生後期	内行花紋鏡	四Ⅳ式		▲		佐賀 173
	伊万里市	午戌	SC010 箱式石棺墓	弥生後期	内行花紋鏡	四Ⅲ式	19.7	★		佐賀 195
長崎	壱岐市	原の辻原ノ久保Ａ	９号土坑	弥生中後期	内行花紋鏡	四Ⅳ式	20			長崎 76
		原の辻 604 番地	採集		内行花紋鏡	四Ⅲ式				長崎 76-1
		原の辻石田大原	1b 整地層		内行花紋鏡	四Ⅲ式	18.5			原の辻所報 36
		車出	土器溜り	弥生後期	方格規矩鏡	Ｖ式	10.7			長崎 73

都府県	市町村	遺跡名	遺構	時期	鏡種	型式	径	状態	備考	下垣集成
長崎	東彼杵町	白井川 F3 区	包含層	弥生中後期	方格規矩鏡	V式	15			長崎 67
	松浦市	栢ノ木	２号箱式石棺墓		内行花紋鏡		10.4			長崎 55
	平戸市	田助古墳	箱式石棺		内行花紋鏡					長崎 57
	大村市	冷泉	３号箱式石棺墓		内行花紋鏡		8.2			長崎 66-4
熊本	山鹿市	大道小学校	採集		方格規矩鏡	ＶＡ式	17.0	▲１孔		熊本 17
	玉名市	大原２区	Ｓ２住居址	弥生後期	内行花紋鏡	四Ⅰ／Ⅱ式		▲		熊本 6-2
	菊池市	古閑原	採集		内行花紋鏡		14.6	▲２孔		熊本 25
		小野崎 年賀塚Ⅰ区	溝 SD-08 下層	弥生	方格規矩鏡			▲		熊本 116-3
		小野崎 年賀塚Ⅲ区	竪穴住居 SH-27	弥生	方格規矩鏡			▲		熊本 116-12
		小野崎 年賀塚Ⅲ区	竪穴住居 SH-10	弥生	内行花紋鏡	四Ⅲ／Ⅳ式		▲		熊本 116-4
	熊本市	二本木６区	竪穴建物 SI16	弥生後期	方格規矩鏡			▲		熊本 51-2
		戸坂	採集		内行花紋鏡	四Ⅰ式？	15	▲		熊本 49
	宇土市	向野田古墳	竪穴式石室＋石棺	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅳ式	17.0			熊本 77
		轟貝塚	採集		内行花紋鏡？		11			熊本 71
	水俣市	北園上野古墳群６区	遺構外		内行花紋鏡？		24		鉛領域 A-B	熊本県報 340
	山都町	枯木原	採集		方格規矩鏡？	Ｖ式？	14.5			熊本 70
	あさぎり町	本目 SK12 墳丘墓	木棺	弥生後期	方格規矩鏡	Ｖ式？		▲１孔		熊本 101-1
鹿児島	鹿児島市	不動寺	H23-4SR10	弥生・古墳	方格規矩鏡	ⅣＢ式？	13.5	▲	鉛領域 A	鹿児島 2-1
	薩摩川内市	麦之浦貝塚 11-J 区	包含層	古墳前中期	方格規矩鏡	ⅣＢ式？		▲		鹿児島 5
大分	宇佐市	宮ノ原	採集		方格規矩鏡？		13.2	▲		大分 23
			12 号竪穴	弥生後期？	方格規矩鏡？		10.4	▲		大分 24
		上原	竪穴住居址	弥生	内行花紋鏡		16	▲		大分 18
		本丸	石蓋土坑墓	弥生後期	内行花紋鏡	四Ⅳ式？	20	▲２孔	鉛領域 B	大分 17
	豊後高田市	割掛	２号石蓋土坑墓	弥生～古墳初	内行花紋鏡		19	▲２孔		大分 86
			４号箱式石棺墓	弥生～古墳初	方格規矩鏡？		17.5	▲		大分 87
	大分市	尼ヶ城	住居址		方格規矩鏡？		16.5	▲２孔		大分 34
		大道第４次	遺構外		方格規矩鏡？			▲１孔		大分 96-1
	九重町	井尻日焼田	SH16 住居址	古墳前期	内行花紋鏡		16	▲		大分 93-3
	玖珠町	おごもりⅡ区	土坑墓		内行花紋鏡			▲		大分 72
	豊後大野市	穴井南	１号住居址	弥生後期	内行花紋鏡		11.4	▲１孔		大分 61-1
		鹿道原	168 号住居址	弥生後期後半	内行花紋鏡？		12.6	▲		大分 97
		二本木	34 号住居址	弥生後期後半	内行花紋鏡			▲１孔		大分 61
愛媛	今治市	相の谷９号墳	箱式石棺	古墳前期	方格規矩鏡？		17	▲１孔		愛媛 13
高知	春野町	西分増井ⅠＡ区	包含層	弥生後期	内行花紋鏡			▲１孔	鉛領域 A	高知 7-2
		馬場末ⅡＢ区	溝 SD1	古代	内行花紋鏡			▲１孔	鉛領域 B	高知 7-4
	高知市	介良	溝 SD1	弥生末期	内行花紋鏡			▲		高知 9
	南国市	田村 Loc.34B	SP1 水溜状遺構	弥生後期中葉	方格規矩鏡	Ｖ式	15.3	▲		高知 6
		田村 Loc.45	ST1 住居址	弥生後期後葉	方格規矩鏡	Ｖ式	16.5	▲		高知 8
香川	観音寺市	一の谷 平塚地区	包含層	弥生～古墳初	内行花紋鏡？		16.1	▲４孔		香川 89
		鹿隈古墳群	？	古墳前期	方格規矩鏡？		13	▲２孔		香川 90
		鹿隈鑵子塚古墳	？	古墳前期	方格規矩鏡？			破片		香川 92
	坂出市	川津中塚	竪穴住居 SH Ⅱ 02	弥生後期？	内行花紋鏡	四Ⅲ／Ⅳ式				香川 59-1
	善通寺市	旧練兵場 22 次Ｌ区	遺構面		内行花紋鏡					香川 80
		旧練兵場 23 次Ｓ区	竪穴住居 SH1058	弥生末期	内行花紋鏡					
		旧練兵場 25 次Ⅱ-4 区	竪穴住居 SH4003	弥生末期	内行花紋鏡	四Ⅱ／Ⅲ式		▲１孔		
		旧練兵場 26 次	溝 SD3151b	古代	方格規矩鏡？	Ｖ式？				
		旧練兵場 28 次	溝 SD10	古代	内行花紋鏡					
		稲木Ｃ地区	第４層遺構面	古墳前期	方格規矩鏡	Ｖ式？	18.6			香川 82
					内行花紋鏡	四Ⅱ／Ⅲ式				香川 83
		甲山北	採集		方格規矩鏡？					香川 83-1
	東かがわ市	樋端	SP Ⅲ 06	弥生末期	内行花紋鏡	四Ⅲ式？	16.4	▲１孔	鉛領域 B	香川 28-1

都府県	市町村	遺跡名	遺構	時期	鏡種	型式	径	状態	備考	下垣集成
徳島	鳴門市	萩原２号墓	積石木椁	弥生末期	内行花紋鏡	四Ⅲ式		▲		徳島 47-1
山口	山口市	下東	河川	弥生後期	内行花紋鏡		13.3	▲		山口 68-1
	岩国市	奥ヶ原Ⅰ地区	SB-1 住居址	弥生後期	内行花紋鏡		11.4	▲		山口 8
	周南市	八代北方	？		内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式	14.8			山口 14
	下関市	柳瀬	土坑 LX007	弥生後期後半	内行花紋鏡	四Ⅱ式？		▲		山口 71
広島	安芸太田町	釜鋳谷	箱式石棺墓？	弥生～古墳初	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式	18.7	▲		広島 2
	北広島町	壬生西谷	SK33 土坑墓	弥生後期	内行花紋鏡	四Ⅱ式	16.3		鉛領域 A-B	広島 25
		中井出勝負峠８号墳	墳丘裾土坑墓	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ式？	19.2	▲１孔	鉛領域 B	広島 27
	広島市	池の内	包含層	弥生～古墳	内行花紋鏡	四		▲		広島 6
		月見城 ST2 古墳	ａ主体木棺	古墳中期	内行花紋鏡	四Ⅱ式？	16.2	▲	鉛領域 A	広島 3
		神宮山１号墳	竪穴式石室	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式	19.7	▲２孔		広島 9
	安芸高田市	青迫 2B 区	包含層	弥生後期	方格規矩鏡	Ⅴ式？	17.7	▲		広島 106
	福山市	神辺御領 E 地点	SD09 最上層	古墳初期	獣帯鏡	Ⅳ式？		▲２孔		広島 76
島根	雲南市	土井・砂１号墳	第２刳抜式木棺	古墳前期	内行花紋鏡		17.7	▲		島根 26-1
	出雲市	白枝荒神	遺構外	弥生～古墳初	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式		▲		出雲市報 38
岡山	総社市	刑部	竪穴住居 37	弥生後期	内行花紋鏡	四Ⅳ式？		▲	鉛領域 B	岡山県報 249
	岡山市	津寺 A(郷境) ４号墳	組合式木棺	古墳初期	内行花紋鏡		14.4	▲２孔		岡山 45
		七つ坑１号墳	第１竪穴式石室	古墳前期	方格規矩鏡	Ⅴ式？				岡山 87
		湯迫車塚古墳	竪穴式石室	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅳ式	19.4		鉛領域 B	岡山 96
		頭高山古墳	箱式石棺	古墳前期	内行花紋鏡			▲		岡山 109
	鏡野町	竹田妙見山古墳	割竹形木棺	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅳ式？	19	▲２孔		岡山 194
鳥取	大山町	妻木晩田松尾頭地区	竪穴住居 SI45	弥生後期後葉	内行花紋鏡		10	▲		鳥取 126-2
		妻木晩田松尾城地区	竪穴住居 SI11	弥生後期後葉	内行花紋鏡			▲		鳥取 126-3
	鳥取市	青谷上寺地国道２区	包含層	弥生～古墳初	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式		▲		鳥取 29-5
		横枕 23 号墳	墳裾表土中	古墳前期	内行花紋鏡？		11			鳥取 131-5
		秋里西皆竹地区	溝 SD09	弥生後期	内行花紋鏡		17	▲		鳥取 10
		秋里松下地区	第３包含層	弥生後期後半	方格規矩鏡	Ⅴ式？	16.5	▲		県センター報 65
		面影山 74 号墳	第１主体 木棺	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅳ式	16.0	★		鳥取 8
		桂見２号墳	第１主体 木棺	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ式	20.2	★		鳥取 6
兵庫	佐用町	西ノ土居	竪穴式石室	弥生後期？	内行花紋鏡	四Ⅱ式？	18.8	▲		兵庫 166-1
	上郡町	井の端７号墳	箱式石棺	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅱ式？	13.7	▲		兵庫 257
	朝来市	向山２号墳	中心主体箱式石棺	古墳前期	内行花紋鏡	円Ⅰ式	10.2	★		兵庫 235
	豊岡市	深谷１号墳	箱式石棺	古墳前期	内行花紋鏡	？		▲鈕座		兵庫 203
	たつの市	岩見北山１号墓	竪穴式石室	弥生後期後半	内行花紋鏡	四Ⅳ式	19.4			兵庫 133
		吉島古墳	竪穴式石室	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅳ式	19.4			兵庫 156
	姫路市	手柄山北丘西丘陵	？		内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式		▲１孔		兵庫 127
	加古川市	西条 52 号墓	竪穴式石室	弥生末期	内行花紋鏡	四Ⅲ式	18.4	★		兵庫 77
		長慶寺山１号墳	竪穴式石室	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ式	20.9			兵庫 84
	小野市	敷地大塚古墳	粘土槨？	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅳ式？	16.0			兵庫 106
	播磨町	大中	７号住居址	弥生後期後半	内行花紋鏡	四Ⅲ式		▲２孔		兵庫 76
	神戸市	吉田南	５号住居址	庄内式	内行花紋鏡	四Ⅱ式		▲１孔		兵庫 70
		得能山古墳	竪穴式石室	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ式	15.5			兵庫 35
		会下山二本松古墳	竪穴式石室	古墳前期	内行花紋鏡？		15.5			兵庫 33
		西求女塚古墳	竪穴式石室	古墳前期	獣帯鏡	Ⅳ式？		破片		兵庫 18
	芦屋市	阿保親王塚古墳	？	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ式	16.4			兵庫 43
	尼崎市	池田山古墳	竪穴式石室？	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式	18.1			兵庫 40
和歌山	和歌山市	太田黒田	採集	弥生後期？	内行花紋鏡	円Ⅰ式	10.0			1991 年実見
		岩橋千塚古墳群	？	？	内行花紋鏡？			▲２孔		和歌山 33
	有田市	円満寺古墳	？	？	内行花紋鏡	四Ⅲ式	19.2			和歌山 38
					内行花紋鏡	四Ⅳ式	17.3			和歌山 37

都府県	市町村	遺跡名	遺構	時期	鏡種	型式	径	状態	備考	下垣集成
大阪	大阪市	瓜破北 SX12 周溝	包含層	弥生後期	内行花紋鏡	四IV式		▲２孔		大阪 112
	茨木市	桑原 B8 号墳	周溝の底	弥生時代？	内行花紋鏡？			▲１孔		桑原遺跡 2008
奈良	奈良市	古市方形墳	粘土槨	古墳前期	内行花紋鏡	四IV式	19.1			奈良 40
	大和郡山市	小泉大塚古墳	竪穴式石室	古墳前期	内行花紋鏡	四IV式	19.8			奈良 80
					内行花紋鏡	四IV式	15.5			奈良 81
					内行花紋鏡	四IV式？	13			奈良 394・395
	生駒市	竹林寺古墳	竪穴式石室？	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅱ式	？			奈良 62
	天理市	大和天神山古墳	竪穴式石室	古墳前期	方格規矩鏡 1	ⅣＢ式	23.4		鉛領域 AL	奈良 86
					尚方作方格規矩鏡 8	ⅣＢ式	20.3		鉛領域 B	奈良 93
					尚方作方格規矩鏡 9	ⅣＢ式	20.8		鉛領域 B	奈良 94
					尚方作方格規矩鏡 16	ＶＡ式	15.9		鉛領域 AL	奈良 101
					方格規矩鏡 19	ＶＡ式？	16.0		鉛領域 AL	奈良 104
					方格規矩鏡 21	Ｖ式	14.0		鉛領域 B	奈良 106
					内行花紋鏡 3	四IV式	19.7		鉛領域 B	奈良 88
					内行花紋鏡 4	四IV式	20.4		鉛領域 B	奈良 89
					内行花紋鏡 17	四Ⅲ/IV式	15.4		鉛領域 B	奈良 102
					内行花紋鏡 20	四Ⅲ式	23.8		鉛領域 B	奈良 105
	桜井市	ホケノ山古墳	石積木椁	弥生末期	内行花紋鏡	四Ⅱ式	26.3			奈良 121-4
		メスリ山古墳	竪穴式石室	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ/IV式		破片		奈良 153
					内行花紋鏡	四？式		破片		奈良 154
		桜井茶臼山古墳	竪穴式石室	古墳前期	内行花紋鏡 28-36	四？式		破片		奈良 146
					方格規矩鏡	ＶＡ式？		破片		奈良 146
					方格規矩鏡 37	Ｖ式？		破片		奈良 146
		池ノ内１号墳	割竹形木棺	古墳前期	内行花紋鏡	円Ⅰ式	11.7			奈良 147
京都	木津川市	椿井大塚山古墳	竪穴式石室	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ/IV式		破片		京都 220
	城陽市	尼塚４号墳	不明	古墳	内行花紋鏡	四Ⅲ式	17.0			京都 240
		西山６号墳	不明	古墳	内行花紋鏡	四IV式	18.0			京都 230
	福知山市	寺ノ段２号墳	第４主体木棺	古墳前期	内行花紋鏡		17.0	▲		京都 29
	与謝野町	蛭子山１号墳	舟形石棺	古墳前期	内行花紋鏡	四IV式	15.1	摩滅		京都 14
滋賀	大津市	上高砂	包含層		方格規矩鏡	Ｖ式？		▲		滋賀 3
	栗東市	十里	旧河道（大溝 101）	弥生末期	内行花紋鏡？		19	▲２孔		滋賀 37-1
	高月町	古保利小松古墳	盗掘坑 B	弥生末期	内行花紋鏡	四Ⅲ/IV式	21.1	★？		滋賀 81-1
三重	伊賀市	石山古墳	東棺粘土槨	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ/IV式	10.2			三重 164
	松阪市	清生茶臼山古墳	粘土槨	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ/IV式	20.3			三重 63
岐阜	関市	砂行	SBE01 住居址	弥生後期	方格規矩鏡	ＶＡ式？		▲１孔		岐阜 162
	大野町	笹山古墳	？	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅱ式	17.6			岐阜 55
		北山古墳	？	古墳前期	内行花紋鏡	四IV式	12.8			岐阜 56
	美濃加茂市	太田大塚古墳	粘土槨	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ/IV式	16.3			岐阜 112
愛知	新城市	石座神社	竪穴住居 3002SI	古墳前期前半	方格規矩鏡	ＶＡ式？		▲２孔	鉛領域 A	愛知 87-1
	豊田市	宇津木古墳	？	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ式	15.9			愛知 82
山梨	甲府市	中道銚子塚古墳	竪穴式石室	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ式	19.8		鉛領域 B	山梨 11
	南アルプス市	長田口	５号溝状遺構	近世	内行花紋鏡？		11.4	▲２孔	鉛領域 B	山梨 49-1
石川	押水町	宿東山１号墳	箱形木棺	古墳前期	尚方作 方格規矩鏡	ＶＡ式	18.0			石川 8
	加賀市	分校カン山古墳	箱形木棺	古墳前期	尚方作 方格規矩鏡	ＶＢ式	16.4			石川 26
神奈川	横浜市	日吉観音松古墳	粘土槨	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ/IV式	19.5			神奈川 5
千葉	成田市	下方丸塚古墳	？	古墳前期	内行花紋鏡	円Ⅰ式	12.6			千葉 58
群馬	太田市	頼母子古墳	粘土槨？	古墳前期	尚方佳 方格規矩鏡	ＶＡ式？	17.8			群馬 174

前半は異体字銘帯鏡Ⅴ式（昭明鏡）・雲気禽獣紋鏡・方格規矩四神鏡Ⅰ・Ⅱ式、獣帯鏡Ⅰ・Ⅱ式、後半は異体字銘帯鏡Ⅵ式・内行花紋鏡四葉座Ⅰ式・方格規矩四神鏡Ⅲ・ⅣA式、獣帯鏡Ⅲ式であり、およそ前半は前一世紀後葉、後半は一世紀第1四半期である。また、5期は方格規矩四神鏡ⅣB～ⅤC式と内行花紋鏡四葉座Ⅱ～Ⅳ式に限定し、およそ一世紀第2四半期から第3四半期である。図表では破鏡を▲、破砕鏡を★で表示したが、人為的な破砕か否かの判別のむずかしいものが少なくない。

また、鉛同位体比分析によって弥生青銅器の原料は漢鏡と同じように大陸から輸入されたことが明らかになり、漢鏡編年をもとに3期後半から5期後半までの相対編年を示したのが表3である。領域a原料を用いた広形銅矛・近畿式・三遠式銅鐸は4期後半以降であり、それ以前が領域A原料を用いた青銅器である。そのうち中細形銅矛は三雲南小路一号・須玖岡本D・立岩一〇号甕棺墓において3期後半鏡がともない、中広形銅矛はおよそ4期前半に併行すると考えられる。

（2）北部九州における伊都・奴二頭体制の成立と展開

糸島平野の三雲南小路一号・二号甕棺墓と福岡平野の須玖岡本D地点甕棺墓にそれぞれ三〇面ほどの漢鏡が副葬されている。前稿に論じたように、いずれも3期後半（前一世紀中葉）鏡が大半を占め、朝鮮半島からほとんど出土しない2期の大型鏡や3期の中型鏡、ガラス璧が多く含まれていることから、経済的な交易でもたらされたのではなく、前漢王朝を中興した宣帝がみずからの徳を宣揚するため、「歳時をもって来たり献見すと云う」（『漢書』地理志下）倭人に対して政治的に賞賜したものと考えられる。その数は一〇〇面を下らなかったと推算される。

大量の漢鏡を棚ぼたのように受領した三雲と須玖の首長は、まず大型鏡・中型鏡・ガラス璧をほぼ均等に山分けした。その質と量は両者ほぼ互角であり、死後みずからの甕棺墓にそれぞれ随葬された。その一方、中型鏡や小型鏡は北部九州甕棺地帯の小首長たちに分配され、遠賀川流域の飯塚市立岩遺跡では3期鏡が一〇号甕棺墓に六面、二八号・三四号・三五号・三九号甕棺墓に一面ずつあり、計一〇面が出土した。三雲と須玖に次ぐ地位にあったのだろう。それ以外はほとんどが一基の甕棺墓に一面ずつであり、径一〇センチ前後の小型鏡が多い。そうした小型鏡は朝鮮半島南部からも十数面出土しているから、宣帝からの賞賜ではなく、楽浪郡の市場に流通していた鏡を購入した可能性が高い。

つづく4期前半になると、複数の漢鏡を副葬する墓はなくなり、ほとんどは径一〇センチ前後の小型鏡となる。3期後半のような漢鏡の特別な賞賜はなく、多くは楽浪漢墓出土鏡と同じタイプであるから、楽浪郡の市場に流通していた漢鏡を入手したのであろう。日本の漢鏡出土総数をみると、2～3期は一〇〇面あまり、4期前半は八八面、4期後半は八五面と微減にとどまっているから、この時期に漢鏡の流入が停滞したわけではない。宣帝から特別に賞賜された数を差し引くならば、むしろ4期に経済的な交易がいっそう活発化したとみることができる。

4期前半鏡は糸島平野と福岡平野での出土は少ないが、佐賀平野ではむしろ数が増えている。吉野ヶ里遺跡の東北三キロに位置する二塚山遺跡では、3期後半鏡が一五号甕棺墓、4期前半鏡が七六号甕棺墓と二九号土坑墓、4期後半鏡が二六号土坑墓から出土し、同一墓地において漢鏡が継続的に副葬されている。吉野ヶ里の北二キロに位置する三津永田遺跡では、4期前半鏡が石蓋甕棺墓と一一五号甕棺墓、4期後半鏡が一〇四号甕棺墓から出土し、佐賀市七ヶ瀬遺跡では4期前半の昭明鏡がSJ三一五三甕棺墓、獣帯鏡がSC三〇六二石棺墓、4期後半の

内行花紋鏡がSC三二五六石棺墓、5期前半の方格規矩四神鏡がSP三二一四木棺墓からそれぞれ一面ずつ出土している。

4期前半鏡はまた、甕棺地帯をこえて肥後・豊前・豊後から中四国・近畿・中部地方にまで拡散している（図6）。これらの地域では漢鏡を副葬する風習がなく、ほとんどが古墳出現期まで伝世した。前節にみたように、鉛同位体比が領域Aに属す確実な伝世鏡の例として、佐賀県武雄市椛島山箱式石棺墓と広島県北広島町中井出勝負峠八号墳の昭明鏡、福岡県北九州市南方浦山古墳・島根県松江市小屋谷三号墳・岡山県総社市鋳物師谷一号墓の雲気禽獣紋鏡があり、後漢時代の踏み返し鏡とみる説〔南二〇一〇〕はあたらない。いずれも在地的な小規模墳からの出土であり、紋様はいちじるしく摩滅している。中井出勝負峠・小屋谷・鋳物師谷鏡は意図的に破砕して副葬していることにも注意される。

4期前半の破鏡もまた北部九州の甕棺地帯をこえて肥後・豊前・豊後から東方に分布が拡大し、多くが古墳出現期に集落内に廃棄されたり墓に副葬されたりしている。鳥取市青谷上寺地遺跡では3期後半の破鏡が出土し、三雲南小路二号甕棺墓や筑前町東小田峯一〇号甕棺墓ではガラス璧の破片を再加工した有孔円盤や垂飾が出土していることから、北部九州において鏡を意図的に分割し、破鏡として分配することが3期後半にはじまっていた可能性が高い。4期前半に下るが、須玖岡本の北にある須玖唐梨遺跡では分割して二孔をあけた破鏡が出土しており、福岡平野の中枢部で鏡の分割がおこなわれていたことがわかる。

同じころ北部九州で鋳造された銅矛も東方に分布を拡大している。出雲市荒神谷遺跡では出雲で生産された三五八本の中細形銅剣c類のほか、銅矛一六本と銅鐸六個が近接して埋納されていた。銅矛は中細形二本と中広形一四本で、その鉛同位体比はラインD四本、領域A一〇本、両種の混合二本である〔松本・足立編一九九六〕。北部九州においてラインD原料は中広形銅矛の段階まで残存していたのである。これら中細形銅剣の原料と中細形・中広形銅矛とは北部九州との交易によってもたらされ、山陰の沿海岸地帯に点在する完形鏡や破鏡も同じルートで交易されたのであろう。

同じころ瀬戸内では平形銅剣が出現する。東京国立博物館に所蔵する平形銅剣二一本の鉛同位体比は、ラインDが二本、ラインDと領域Aの混合が一本、のこりは領域Aに位置し〔井上ほか二〇〇二〕、荒神谷の中細形・中広形銅矛と同じような構成である。その原料は荒神谷と同じころに北部九州からもたらされたのであろう。また、高松市円山山頂から中細形銅矛一本、同石清尾山北麓の下ノ山から中広形銅矛二本が出土し、善通寺市瓦谷からは中細形銅矛一本にともなって中細形銅剣四本（b類一・c類三）・中広形銅剣一本・平形銅剣二本が出土している。これらも荒神谷と同じ3期後半から4期前半にかけての制作であろう。

これに関連して、石清尾山猫塚古墳から3期後半の連弧紋銘帯鏡（清白鏡、径一六・七センチ）が出土していることに注意される。古墳出土の3期鏡としては唯一の例だが、鉛同位体比は領域Aに属し、これら武器形青銅器と同時期に位置づけられる。猫塚古墳は全長一〇〇メートル足らずの双方中円墳で、6期・7期鏡や「仿製」三角縁神獣鏡のほか、鉄剣形銅剣が二〇本ほど（現存一七本）まとまって出土している〔梅原一九三三〕。鉄剣形銅剣は平形銅剣の系譜を引くものではなく、制作年代も古墳出現期に下るとみられるが、そのまとまりからみて高松平野での鋳造が推測される。また、猫塚の下方にある鶴尾神社四号墳からは伝世鏡論の端緒になった4期後半の「漢有善銅」銘方格規矩四神鏡が出土し、継続的な前漢鏡の流入が確かめられる。ちなみに、善通寺市旧練兵場遺

跡から出土した弥生後期の銅鏃の鉛同位体比は、一五点が領域a、二点が領域Aであり〔平尾二〇一一〕、古墳初頭の岡山市百間川原尾島遺跡丸田調査区九号住居址から出土した鉄剣形銅剣の鉛同位体比は領域aである〔平尾ほか一九九五〕。平形銅剣の制作地は不明だが、高松平野における青銅器の鋳造は3期後半にはじまり、北部九州からその原料にともなって銅矛や漢鏡などがもたらされた可能性が高い。

伊予・土佐にも漢鏡や北部九州の銅矛が広く分布している。今治市唐子台一四丘墓と宿毛市高岡山二号墳からは、いちじるしく摩滅した4期前半の昭明鏡が出土している。どちらも在地的な小規模墳であるが、高岡山には古墳時代の石釧がともなっている。4期前半の破鏡が出土した南国市田村遺跡群E1区ST一〇二住居址は弥生後期前半、同I2区の中広形銅矛埋納坑は弥生中期末〜後期初頭とされる〔坂本二〇〇六〕。どちらも伝来からほどなくして埋もれたらしい。また、春野町西分増井遺跡では、鍛冶関係遺構の集中する北端地区において後期初頭のST九竪穴住居址から中広形銅矛二本分の破片が出土し、周辺からは扁平鈕式銅鐸や広形銅戈の破片も発見されている〔出原編二〇〇四〕。青銅器のスクラップを溶かして何を生産していたのかはわからないが、北部九州との交流のなかで4期前半鏡や中広形銅矛が流入したのであろう。

以上のように3期後半から4期前半にかけて北部九州で生産された中細形・中広形銅矛は中四国に拡散し、北部九州が仲介した青銅器原料を用いて出雲では中細形銅剣、北四国では平形銅剣が生産された。近畿を中心とする扁平鈕式・突線鈕1式銅鐸などの原料も、同じように北部九州を経由して交易されたと考えられる。

下條信行〔一九八二〕によれば、中細形銅矛はもっぱら福岡平野で生産され、約三〇本の出土を数えるが、中広形銅矛は佐賀平野東部でも生産がはじまり、出土数は約一八〇本に激増する。両型式の分布圏に大きな変化はないが、出雲の荒神谷でも中細形二本に対して中広形は一四本に急増している。出雲の中細形銅剣、北四国の平形銅剣、近畿の扁平鈕〜突線鈕1式銅鐸などの原料を合わせるならば、4期前半における青銅器原料の輸入総量は3期後半の十数倍におよんだ可能性がある。

3期後半に宣帝から三雲と須玖の首長に大量の漢鏡が賞賜され、その一部は北部九州甕棺地帯の小首長に対して分配された。糸島平野では以後も4期後半の井原鑓溝甕棺墓、5期前半の平原一号墓まで漢鏡の大量副葬墓が継続しているが、福岡平野では以後の大量副葬墓は未発見である。そのかわり、須玖遺跡群を中心に比恵・那珂遺跡群や井尻B遺跡群などで各種の青銅器が分散的に生産され、弥生中期後半から後期へと段階的に須玖遺跡群の比重が増しているという〔田尻二〇一二：二九〇〜三〇一頁〕。糸島平野は『魏志』倭人伝にいう伊都国、福岡平野は奴国が所在したところであり、伊都国は「千余戸」にすぎないが「郡使の往来常に駐まる所」であるのに対して、奴国は「二万余戸」を擁する大国であった。伊都国は対外交渉を主に担い、奴国は経済的なセンターとして機能していたと考えられる。その二〇〇年あまり前、宣帝の賞賜によって北部九州甕棺地帯に三雲と須玖の首長をトップとする二頭体制が成立し、3期後半から4期前半にかけて須玖の首長が青銅器生産と東方交易をコントロールしていくようになったのであろう。

ところが4期後半になると、情勢が一変する。4期前半鏡の分布していた中四国の大部分は一転して漢鏡の空白地帯になり、北部九州と近畿を中心とするふたつの分布圏に分かれる（図6）。北部九州の中広形銅矛は広形銅矛に大型化し、出土数はやや減少するだけでなく、山陰や瀬戸内から後退し、対馬・北部九州から伊予西部・土佐までの範囲に縮小

する。とりわけ中四国の中細形銅剣と平形銅剣が4期前半のうちに生産を中止したことから、北部九州を仲介とする青銅器原料の交易が大きく減退することになった。四国西南部を除いて漢鏡や銅矛が流通していないのは、それが一因であろう。

しかし、楽浪郡から北部九州へは多数の4期後半鏡が流入している。三雲の南に位置する井原鑓溝では、甕棺から方格規矩四神鏡のⅡ式一面とⅢ式一七面以上が出土している。三雲につづく漢鏡大量副葬墓であるが、いずれも径一七センチに満たない中小型鏡であり、楽浪郡の市場交易で入手されたと考えられる。また、そのヤリミゾ地区では二〇〇四年にはじまる発掘調査で一号・七号・一五号・一七号木棺墓から4期後半の内行花紋鏡が一面ずつ出土している。それらの年代は井原鑓溝の直後で、いずれも鏡は意図的に打ち割って副葬されていた。

佐賀平野でも三津式の指標とされた三津永田一〇四号甕棺墓から4期後半の獣帯鏡、二塚山二六号土坑墓・尼寺一本松SJ七〇二六甕棺墓から内行花紋鏡、同SJ七〇〇七甕棺墓から方格規矩四神鏡が出土し、唐津平野の桜馬場甕棺墓からは4期後半から5期前半の方格規矩四神鏡と内行花紋鏡が出土している。

破鏡は甕棺地帯の周辺におよび、とりわけ豊後に点在していることに注意される。四国への渡海地である日出町真那井と臼杵市坊主山から広形銅矛がそれぞれ七本ずつ出土している〔下條一九八二〕ことを考え合わせると、4期後半鏡と広形銅矛とが連動していた可能性があろう。

弥生中期に斉一性をもって広がっていた「北部九州系土器は、後期にはいるとその分布圏がいちじるしくせばめられ」ると森貞次郎〔一九六六〕は指摘している。土器と4期後半鏡や広形銅矛とはそれぞれ性格が異なるものの、分布圏の縮小は軌を一にする現象であろう。

井原鑓溝につづく糸島平野の首長墓が、その西北約一・五キロに位置する平原一号墓である。第一節にみたように、光武帝から下賜された超大型内行花紋鏡五面と5期前半の方格規矩四神鏡三一面が鏡群の主体であるが、4期前半の雲気禽獣紋鏡、4期後半の方格規矩四神鏡と内行花紋鏡が一面ずつ含まれている。井原鑓溝・ヤリミゾ地区と同じころに伝来し、現地で数十年ほど伝世したのだろう。出土した四〇面の鏡は、ヤリミゾ地区の例と同じようにすべて副葬時に破砕されている。これに対して糸島平野の西端に位置する一貴山銚子塚古墳は、全長一〇〇メートルあまりの前方後円墳で、後円部の竪穴式石室から「仿製」三角縁神獣鏡八面にともなって5期前半の鍍金方格規矩四神鏡と内行花紋鏡が出土した。この二面は現地で二〇〇年ほど伝世したのだろう。

5期前半の「尚方作」方格規矩四神鏡は、吉野ヶ里町の横田と松葉、佐賀市七ヶ瀬SP三二一四木棺墓、小城市寄居ST〇一号墳、武雄市椛島山箱式石棺墓など佐賀平野から多く出土している。5期後半に下ると、前節にみたように、唐津市中原ST一三四一四墓の中心主体に内行花紋鏡四葉座Ⅲ式一面、ST一三四一五墓の中心主体に内行花紋鏡四葉座Ⅳ式二面、周溝内埋葬に方格規矩四神鏡VC式一面がともない、いずれも鏡を破砕して副葬している。これに対して、旧甕棺地帯の周辺地域では箱式石棺墓に完形の内行花紋鏡を副葬する例が散見する。遠賀川上流域では香春町宮原三号墓から大小二面、福智町宝珠・嘉麻市笹原・田川市伊加利・宮若市黄金塚から一面ずつ出土している。伊万里市午戌SC〇一〇墓の例もほぼ完形の状態で出土した。また、宇土市向野田古墳は全長八六メートルの前方後円墳であり、竪穴式石室に囲まれた舟形石棺内から7期の浮彫式獣帯鏡や魏晋の方格規矩鏡にともなって伝世の内行花紋鏡が出土している。漢鏡分布のドーナツ化現象であろう。

5期の破鏡は4期前半の分布域を回復し、南へは肥後や薩摩、東へは中四国に波及している。なかでも高知平野には5期の破鏡が四例あり、内行花紋鏡の鉛同位体比をみると、春野町西分増井ⅠA区例は領域A、馬場末ⅡB区例は領域Bであり〔平尾・鈴木二〇〇四〕、5期前半から後半へと継続している。高知平野からは広形銅矛一六本のほか、西分増井遺跡からは広形銅戈片も出土しており、それらにともなって破鏡が流入したのであろう。広形銅戈は福岡・大分以外では唯一の例である。

広形銅矛・広形銅戈の鋳型からみると、依然として福岡平野に生産の中心があるが、糸島平野でも両方の生産がはじまっている〔下條一九八二〕。3期後半に成立した伊都・奴二頭体制は、倭奴国王冊封の5期前半までは維持されたものの、平原一号墓以後、外交と内政を分掌する二頭体制は少しずつ変容していったのかもしれない。それに代わるように登場するのが近畿中枢部の王権である。

(3) 近畿中枢部における倭王権の形成

瀬戸内東部から近畿中枢部には、銅鐸原料にともなって3期後半〜4期前半の漢鏡が散発的に流入していた。ところが4期後半になると、大阪府紫金山古墳・岐阜県美濃観音寺山古墳の王莽鏡や大型の内行花紋鏡四葉座Ⅰ式が突如としてもたらされる〔岡村二〇二一〕。しかも、北部九州出土の4期後半鏡はすべて径一九センチ以下であるのに、岡山以東から出土した左の八例はいずれも径二二センチをこえる優品である。

①岡山県花光寺山古墳　内行花紋鏡　二四・五センチ
②大阪府紫金山古墳　方格規矩四神鏡　二二・八センチ
③奈良県伝ホケノ山古墳　内行花紋鏡　二三・二センチ
④京都府椿井大塚山古墳　内行花紋鏡　二七・八センチ
⑤京都府八幡東車塚古墳　内行花紋鏡　二二・三センチ
⑥岐阜県美濃音寺山古墳　方格規矩四神鏡　二二・六センチ
⑦岐阜県瑞龍寺山山頂墓　内行花紋鏡　二二・一センチ
⑧静岡県松林山古墳　内行花紋鏡　二二・七センチ

これらの大鏡は⑦鏡以外すべて前期古墳出土のため、中国「王朝の膝下で宝鏡として保管され」〔辻田二〇一九：一四八頁〕、古墳時代になってもたらされたとみる説がある。しかし、王莽を打倒した後漢王朝が「新」「新家」や「王氏」の名を銘文に記した鏡を宝器とすることはありえないし、そもそもそれらは宮廷鏡であっても宝鏡ではない。また、これらを後漢時代の踏み返し鏡とみる意見も根強くある。しかし、②・④・⑥・⑧鏡の鉛同位体比は領域Aに属し〔岡村二〇二一〕、領域Bの⑤鏡については判断を保留するとしても、⑦鏡の出土墓は弥生後期前半（山中Ⅰ式第3段階）にさかのぼるから、それらの制作は後漢時代には下らない。しかも、王莽宮廷鏡を含むこれら八面の大鏡は、北部九州を飛びこえ、近畿中枢部を中心とする備前から遠江までの範囲に分布し、領域a原料を用いた近畿式・三遠式銅鐸の広がりと大まかに一致している。そこで、大鏡と領域a原料の同時性を手がかりに、弥生社会の動向を探ってみよう。

近畿式・三遠式銅鐸の成立直前には、六区袈裟襷文銅鐸正統派の「横帯分割型」と「大福型」、正統派流水文の「石上型」と「迷路派流水文」、「東海派」という五グループが並立し、それらが統合されて近畿式・三遠式が成立する〔難波二〇一一b〕。大量にもたらされた領域a原料がこれら銅鐸群の統合をうながしたことは想像に難くない。

吉備からみていくと、4期前半は弥生末期（酒津式）の小規模墳である備中の総社市鋳物師谷一号墓と備前の赤磐市用木二号墳から完形鏡が出土している。両鏡とも紋様がいちじるしく摩滅し、鋳物師谷鏡の鉛同

位体比は領域Aに属しているため、鈕孔の方向を根拠に後漢後期に下げる説〔南二〇一〇〕は妥当ではない。その後、備中では5期の破鏡が津寺四号墳と刑部三七号住居址から出土しているものの、4期後半〜5期の完形鏡は発見されていない。備中の岡山市高塚遺跡フロヤ調査区（高塚銅鐸）・同角田調査区、倉敷市妹からは突線鈕2式銅鐸が出土し、高塚銅鐸と妹銅鐸は迷路派流水文の系譜をもち、妹銅鐸の鉛同位体比は領域A・B間の例外的な値である〔井上ほか二〇〇二〕。高塚銅鐸は領域a原料を用いた近畿式銅鐸であり、前節にみたように、鋳造後ほどなくして埋納され、以後、備中からは銅鐸が消失する。備前でも銅鐸は衰退してゆくが、4期後半の完形鏡が①鏡のほか岡山市矢藤治山墓・同浦間茶臼山古墳から、5期鏡が岡山市七つ坑一号墳・湯迫車塚古墳から出土している。備前と備中の境界に位置する矢藤治山は、全長三五メートルほどの前方後円形墳丘墓で、後円部の竪穴式石室からは方格規矩四神鏡が人為的に破砕された状態で出土した。出現期古墳の浦間茶臼山は全長一三八メートルの前方後円墳、湯迫車塚は全長四八メートルの前方後方墳であり、浦間茶臼山は盗掘を被り、獣帯鏡の破片が出土しただけだが、湯迫車塚の竪穴式石室からは5期後半の内行花紋鏡、7期の画紋帯神獣鏡、三角縁神獣鏡一一面が出土している。また、①鏡を出土した花光寺山古墳は全長一〇〇メートル足らずの前方後円墳で、組合せ式の長持形石棺から①鏡や「仿製」三角縁神獣鏡が出土している。

高塚銅鐸の埋納以後、その足守川流域では弥生後期後半に巨大な楯築墳丘墓が造営され、独自性がますます強まってゆく。それは大量の銅剣・銅矛・銅鐸を荒神谷に、銅鐸三九個を加茂岩倉に埋納した後、独自の四隅突出型墳丘墓を発達させてゆく出雲と軌を一にしている。とくに出雲製と推測される扁平鈕2式〜突線鈕1式の加茂岩倉一八号・二三号・三五号銅鐸は、高塚銅鐸よりやや先行するが、同じように制作からほどなくして埋納されている〔角田・山崎編二〇〇二〕。讃岐でも平形銅剣の衰退後は完形の漢鏡や広形銅矛・近畿式銅鐸を受け入れていない。近畿中枢部との関係を深めて継続的に完形の漢鏡を受け入れた備前とは反対に、備中・出雲・讃岐は自立する方向に進んでいったのであろう。

因幡でも鳥取市高住の扁平鈕式新段階末を最後に銅鐸は衰退するが、鳥取平野を貫流する千代川西岸の桂見二号墳と東岸の面影山七四号墳から5期後半の内行花紋鏡が出土している。どちらも鏡を人為的に破砕して副葬し、桂見二号墳では7期の「吾作」浮彫式獣帯鏡が形を保ったまま共伴していた。また、鳥取市の青谷上寺地遺跡国道二区・秋里遺跡西皆竹地区・同松下地区・横枕二三号墳から5期の破鏡が出土している。桂見・面影山とも古墳出現期の在地的な小規模墳であり、因幡では三角縁神獣鏡は一面も出土していないことから〔久保二〇〇九〕、これら完形鏡と破鏡はいずれも独自に入手された可能性が高い。

次に東海地方をみると、4期前半の雲気禽獣紋鏡の破鏡が濃尾平野中央部の名古屋市高蔵遺跡と清須市朝日遺跡から出土している。高蔵鏡は伝来からほどなくして弥生後期前葉（山中Ⅰ式第1段階）の土坑に廃棄され、垂下用の二孔を穿った朝日鏡は弥生後期後葉（山中Ⅱ式末）まで伝世した。つづく4期後半に⑥・⑦・⑧鏡や領域a原料が流入し、三遠式銅鐸の鋳造がはじまる。⑥・⑦鏡は濃尾平野の北辺に偏在し、⑦鏡は長期に伝世することなく弥生後期中葉（山中Ⅰ式第3段階）に山頂の岩坑に埋められたのに対して、⑥鏡は全長二一メートルの前方後方形墳丘墓の岩坑から出土し、弥生末期（廻間Ⅱ式）に編年される〔美濃市二〇一二〕。一方、⑧鏡の出土した松林山古墳は、天竜川東岸の磐田原台地に位置する全長一〇〇メートルあまりの前方後円墳であり、長大な竪穴式石室に三角縁

神獣鏡を含む鏡四面が副葬されていた。

三遠式銅鐸の源流となる東海派銅鐸は、北摂津の東奈良遺跡で制作された三対耳四区袈裟襷文銅鐸を継承し、当初は近畿に分布するものの、まもなく飛騨・尾張・三河に分布が転移していった〔清水二〇〇三〕。朝日遺跡で発掘された東海派の突線鈕1式銅鐸は、前節にみたように、制作からさほど時間を経ない弥生中期末・後期初頭の埋納と考えられ、その制作は4期前半の高蔵・朝日鏡とほぼ同時期に位置づけられる。つづく突線鈕2式に成立する三遠式銅鐸は、東三河から西遠江に出土が集中し、東海派銅鐸から三遠式銅鐸へと段階的に東方へと転移していったことがわかる。4期後半に⑥・⑦・⑧鏡にともなって領域a原料がもたらされ、工人集団の再編によって三遠式銅鐸が成立したのであろう。とくに東奈良遺跡は東海派銅鐸の原郷であり、そこに近い紫金山古墳から②王莽宮廷鏡が出土していることから、これら銅鐸と漢鏡の東方展開は北摂津の集団が主導していた可能性が高い。

5期に下っても美濃には漢鏡の流入がつづき、大野町の笹山古墳と北山古墳、美濃加茂市太田大塚古墳から完形の内行花紋鏡、関市砂行SBE〇一住居址から方格規矩四神鏡VA式の破鏡が出土している。可児市久々利から突線鈕5式の近畿式銅鐸が出土していることにも注意される。また、東三河の新城市石座神社SI三〇〇二竪穴住居址から出土した方格規矩四神鏡の破鏡は領域Aの鉛同位体比であり〔西田・平尾二〇一五〕、古段階の三遠式銅鐸にともなって流入したのであろう。

美濃から西に伊吹山地をこえた東近江では、全長六〇メートルの前方後方墳の高月町古保利小松古墳から、いちじるしく紋様の摩滅した4期後半の方格規矩四神鏡と5期後半の内行花紋鏡が破砕された状態で出土した。出土土器は庄内式後半併行とされている〔黒坂編二〇〇一〕。また、長浜市三川丸山古墳からも摩滅のいちじるしい4期後半の方格規矩四神鏡が出土している。弥生末期の墳墓に伝世の漢鏡を破砕副葬することは、後述のように近畿中枢部の周辺現象であり、伊吹山地の東西で美濃と近江とが連携していた可能性が高い。

弥生後期の山中式土器は濃尾平野を中心に分布するが、4期後半以降の漢鏡はその北辺部に多く、⑧鏡は天竜川東岸におよんでいる。三遠式銅鐸もその東辺に集中し、濃尾平野に貫入するのは突線鈕4式の三遠式銅鐸と突線鈕5式の近畿式銅鐸というそれぞれの最終段階に下る〔北島二〇〇二〕。また、突線鈕3〜5式の近畿式銅鐸は、濃尾平野を迂回するように伊賀・伊勢から三河・遠江にかけて帯状に分布している。三遠式銅鐸は近畿式銅鐸と共通する領域a原料を用いているものの、近畿中枢部は濃尾平野の外縁にあたる美濃・東三河・西遠江の勢力と関係を強めたようにみえる。そのうち三河・遠江への足がかりになった伊賀と伊勢では、5期後半の内行花紋鏡が伊賀市石山古墳と松阪市清生茶臼山古墳から出土している。石山古墳は全長一二〇メートルの前方後円墳、清生茶臼山古墳は径五五メートルの円墳であり、どちらも三角縁神獣鏡がともなっていた。さらに、近畿式銅鐸が伊勢湾をこえて渥美半島から駿河湾におよんだ先には、5期後半の内行花紋鏡が出土した前方後円墳の横浜市日吉観音松古墳や甲府市中道銚子塚古墳がある。清生茶臼山鏡は径二〇・三センチ、日吉観音松鏡は径一九・五センチ、中道銚子塚鏡は一九・八センチと比較的大きいことにも注意される。

最後に近畿中枢部について。②王莽宮廷鏡の出土した北摂津の紫金山古墳は全長一一〇メートル、径二七・八センチという④鏡の出土した南山城の椿井大塚山古墳は全長一七五メートルの前方後円墳であり、どちらも竪穴式石室から三角縁神獣鏡を含む多数の副葬品が出土した。と

りわけ、紫金山に近い東奈良遺跡は弥生中期における銅鐸生産の拠点のひとつであり、ここで生みだされた東海派銅鐸は4期前半に東方に転移し、4期後半に三遠式銅鐸を成立させたことは上述した。また、東奈良や高槻市芥川遺跡からは4期後半の破鏡が出土している。このように4期後半の漢鏡は淀川・木津川流域に点在するのに対して、大和川流域では③伝ホケノ山鏡の一面にすぎない。ところが5期になると、大和の出土数が爆発的に増加する。そうした5期への推移を西からみていこう。

近畿中枢部の一角を占める西摂津では、5期になると得能山・会下山二本松・阿保親王塚・池田山古墳から内行花紋鏡が出土している。会下山二本松と池田山は前方後円墳であり、阿保親王塚と池田山には三角縁神獣鏡がともなっている。

摂津に隣接する東播磨の加古川流域では、4期後半に小野市敷地大塚古墳から方格規矩四神鏡、西脇市滝ノ上二〇号墳から内行花紋鏡が出土し、どちらも径一五センチあまりの中型鏡で、紋様がいちじるしく摩滅している。5期後半になると、敷地大塚のほか加古川市西条五二号墓・長慶寺山一号墳、揖保川流域のたつの市岩見北山一号墓・吉島古墳から内行花紋鏡が出土している。西条五二号墓と岩見北山一号墓は、小規模な墳丘をもち、竪穴式石室から鏡が破砕された状態で出土した〔櫃本二〇〇二：一三六～一七五頁〕。どちらも古墳以前の在地的な墳墓とされる。このような古墳出現期における伝世鏡の破砕副葬は、上述の美濃・近江や吉備・因幡でも確かめられ、漢鏡の入手経緯に起因する近畿中枢部の周辺現象であろう。これに対して吉島古墳は、全長三〇メートルの前方後円墳で、竪穴式石室から三角縁神獣鏡など六面の鏡が出土している。古墳は中国山地への入口に立地し、揖保川をさかのぼった西播磨の山間部では、少なくとも三点の突線鈕4式銅鐸が発見されている。備前に隣接する千種川流域の佐用町西ノ土居古墳・上郡町井の端七号墳からは5期前半にさかのぼる内行花紋鏡の破鏡が出土し、美作の鏡野町妙見山古墳からは5期後半の破鏡が出土している。これら西播磨の山間部における漢鏡と銅鐸の分布は、美作を経て因幡・伯耆・出雲・備前・備中に通じる内陸交通と関係があろう。

近畿北部の丹後では弥生中期後葉の京丹後市奈具岡遺跡から大量の鉄器や鉄素材が出土し、後期前葉の三坂神社三号墓や佐坂二六号墓からは中国製とみられる素環頭鉄大刀が出土している〔野島二〇〇〇〕。早くから日本海を通じた交易が開かれていたのだろう。加悦谷の与謝野町蛭子山一号墳は全長一四五メートルの前方後円墳で、舟形石棺から5期後半の内行花紋鏡が出土し、近くの与謝野町比丘尼城では突線鈕5式銅鐸、舞鶴市下安久では突線鈕3式の近畿式銅鐸と三遠式銅鐸が共伴している。また、但馬の豊岡市久田谷では突線鈕5式の近畿式銅鐸が人為的に破砕された状態で出土し、円山川をさかのぼった朝来市向山二号墳では5期後半の内行花紋鏡が竪穴式石室に破砕副葬されていた〔中村編一九九九〕。それは小規模な長方形墳であり、墓坑内に布留式古段階の土器がともなっていた。丹後山地の東西に最終段階の銅鐸と5期後半鏡がもたらされたのであるが、それぞれが東西で対照的な最期を迎えている。

近畿南部の紀伊において、有田川流域を境に北紀伊には「聞く銅鐸」、南紀伊には「見る銅鐸」が多く分布し〔田中一九七〇〕、後者の多くは突線鈕4～5式銅鐸である。その有田川北岸に位置する円満寺では5期後半の内行花紋鏡二面が出土し、出土古墳の状況は不明だが、大和以外では唯一の複数面出土である。

5期後半鏡とそれに併行する新段階の近畿式銅鐸とは、宝器と共同体祭器という性格のちがいがあり、状況証拠にもとづく分布論にすぎな

いが、伊賀・伊勢から三河・遠江、西播磨、丹後・但馬、南紀伊における銅鐸の偏った広がりからみると、なんらかの政治的経略にもとづいてそれぞれ近畿中枢部から配布された可能性が高い〔岸本二〇一四〕。

その近畿中枢部では5期に漢鏡の出土数が急増し、なかでも大和における漢鏡の出土数は群を抜いている。大和全体の推移をみると、4期前半鏡はゼロ、4期後半は③伝ホケノ山鏡だけであったから、5期に爆発的な増加をみたことがわかる。倭奴国王冊封期にあたる5期前半の方格規矩四神鏡は、平原一号墓の三一面に対して大和天神山の六面と桜井茶臼山の二面の計八面にすぎないが、5期後半の内行花紋鏡になると、桜井茶臼山の九面〔東影編二〇一一〕は型式判定がむずかしいため留保するとしても、大和天神山の四面をはじめ、小泉大塚に三面以上、メスリ山に二面があり、近畿中枢部の出土総数は北部九州を凌駕している。倭の初期王都とされる纒向遺跡の成立は纒向式（庄内式）期に下るが、漢鏡を大量に集積する政体が5期の大和に突如として興起したのは確かであろう。なお、大和天神山の方格規矩四神鏡のうち一号・一六号・一九号鏡の鉛同位体比は領域Aに属し〔馬淵二〇一一〕、「後漢中期以降の技術が用いられている」〔南二〇一〇〕という指摘はあたらない。

4期後半に近畿中枢部が勃興したのは、北部九州の影響力が山陰・瀬戸内から大きく後退したところへ、領域a原料が突如として大量に流入したことに最大の要因があろう。このとき五グループに分かれていた「聞く銅鐸」の工人たちは再編統合され、近畿式と三遠式の「見る銅鐸」が創出されたのである。輿馬を仮る者は足を労せずして千里を致すがごとく、銅鐸原料を大量に入手した近畿中枢部は体制を整備し、ほどなくして銅鐸の生産と流通をコントロールする政体が誕生したのであろう。近畿式・三遠式銅鐸の制作工房はみつかっていないが、王莽宮廷鏡を受領した北摂津の集団が主導権を握り、吉備から遠江までの範囲に銅鐸や漢鏡を分配し、ゆるやかな政治的・経済的ネットワークが構築された可能性が高い。その状況は3期後半の北部九州と似ている。しかし、経済的な原資となる青銅器原料が労せずして大量に入手できたこと、漢鏡を墓に随葬することなく、君臣関係もしくは同盟関係の証しとして分配され伝世されたことにより、政治と経済の両面における持続的な発展が可能になった。その結果、つづく5期前半には大和において漢鏡の集積がはじまり、ここに古墳時代に継承される王権が誕生したのであろう。

5期前半の方格規矩四神鏡は、大和天神山と桜井茶臼山に八面あるほか、石川県の宿東山一号墳と分校カン山古墳、群馬県の頼母子古墳からも出土している。銅鐸分布圏外であるが、宿東山と分校カン山はいわゆる纒向型前方後円墳〔寺澤一九八八〕であり、頼母子には三角縁神獣鏡二面がともなっていた。頼母子鏡は4期後半の東方経略の延長線上にあろう。また、加賀では小松市一針B遺跡において弥生後期前半（猫橋式）のSI〇一竪穴式住居址から連鋳銅鏃を制造したとみられる土製鋳型や坩堝・取瓶といった青銅器鋳造関連遺物、管玉未成品・玉砥石などの玉造関連遺物、鉄滓・炉壁などの鍛冶関連遺物が出土している〔荒木編二〇〇二〕。土製鋳型や坩堝・取瓶の形は奈良県唐古・鍵遺跡の出土例に類似し、そうした青銅器鋳造遺物は滋賀県守山市服部・野洲市下々塚・東近江市石田遺跡、石川県羽咋市吉崎・次場遺跡など近江から北陸地方に点在している。ちなみに福井県鯖江市西山公園から一括出土した八点の有鉤銅釧は領域a原料を用い〔井上ほか二〇〇二〕、一針Bと同じころに現地で鋳造されたのであろう。そうした銅釧〔木下二〇一三〕や一針Bの鋳型から推測される銅鏃などは、三遠式銅鐸の東方展開と連動し、弥生後期のうちに東海・南関東に広がっていったと考えられる。

5期後半の内行花紋鏡は、膝下の大和・山城・摂津に厚く分配されたが、東へは相模の日吉観音松古墳や甲斐の中道銚子塚古墳、北へは丹後の蛭子山一号墳、西へは播磨の吉島古墳や備前の湯迫車塚古墳におよんでいる。これら古墳出土の漢鏡は、それぞれの有力者が独自に入手して伝世したものとかつて推測したが〔岡村一九九九：一〇二～一一一頁〕、大和において漢鏡を集積する王権がすでに誕生していること、4期後半から5期後半までの漢鏡と近畿式銅鐸の分配とが少なからず連動していることからみれば、むしろ近畿中枢部の「王」から各地の有力者に分与されたと考えるのが妥当であろう。とくに、古墳出土の伝世鏡が完形のまま副葬されたことからみれば、それは「王」との君臣関係もしくは同盟関係を象徴するレガリアであるため、「首長の地位の恒常性の外的承認」〔小林一九五五〕をえて首長霊の宿る古墳に永遠に保全される必要があったのだろう。ただし、4期後半の大鏡が分配された備前から遠江までの範囲内にあっても、備前・播磨・但馬・近江・美濃など周辺地域における伝世鏡は、少なからず在地的な墳墓に破砕副葬されている。それは「王」からの贈与ではなく交易によって独自に入手した威信財であったため、4期前半の北部九州にはじまる慣習に倣って破砕副葬したのであろう。破鏡も基本的に北部九州からの交易によって流通した格落ちの威信財であったため、古墳出現前後に伝世の役割を終えると、あるものは集落内に廃棄され、あるものは一種の装身具として墳墓に副葬されたと考えられる。これまで伝世鏡として一括りにしていた古い漢鏡については、レガリアと威信財とに分けて考える必要があろう。

倭奴国王の冊封からちょうど半世紀を経た西暦一〇七年、『後漢書』安帝紀に「冬十月、倭国遣使奉献」とあり、同東夷列伝に「安帝永初元年、倭国王帥升等生口百六十人を献じ、請見を願う」という。その二年前には高句麗が遼東郡に侵入し（同高句麗伝）、前年には鮮卑が漁陽郡に侵入して太守張顕が戦死しており（同殤帝紀）、辺境の騒乱相次ぐ「永初多難」（同東夷列伝）のなかで、倭国王は一六〇人もの生口を連れて遣使したのである。二三九年に倭王卑弥呼が魏に遣使したときは男女の生口一〇人、二四八年の台与の朝貢では三〇人の献上であるから、一桁ちがう規模である。また、光武帝の冊封では「倭奴国王」だったのが、このときは「倭国王」に格上げされていることを評価する意見も多い。岸本直文〔二〇一四〕は、漢鏡5期の畿内に「ヤマト国」が成立し、そこから倭国王帥升があらわれたと推測している。上述の4期後半から5期後半までの推移をみると、その蓋然性は高い。近畿中枢部はその一〇〇年足らずの間に広域の政治的・経済的ネットワークを構築し、一六〇人もの生口を集めて後漢王朝に朝貢したのだろう。

勢いあまって倭奴国王冊封の五〇年後まで論及したが、最後に本稿の提言をまとめておこう。第一は、漢鏡から倭王権の形成を考えるとき、中国皇帝から政治的に贈られた鏡と倭人が楽浪郡の市場で入手した鏡とを区別する必要がある。第二に、漢鏡の鉛同位体比は5期前半に領域Aから領域Bに転換したことにより、古墳出土の領域A鏡も弥生時代のうちにもたらされた伝世鏡と考えられる。分析例を増やすとともに、大陸からの輸入原料を用いていた弥生青銅器との関係を時期ごと地域ごとに細かく検討する必要があろう。第三に、弥生後期青銅器の画一的な領域a原料について、本論では4期後半における王莽からの賞賜と考え、弥生青銅器や漢鏡の時期別推移と重ね合わせることによって、それ以前の北部九州における伊都・奴二頭体制の成立と展開、それ以後の近畿中枢部における倭王権の形成について論じた。弥生青銅器の年代観でも日本考古学の通説とはかなりちがう結論が導かれた。批正を乞う。

参考文献

赤塚次郎　二〇〇四「東日本としての青銅器生産」『伊勢湾岸における弥生時代後期を巡る諸問題　山中式の成立と解体』第一一回東海考古学フォーラム

新井　宏　二〇〇〇「鉛同位体比による青銅器の鉛産地推定をめぐって」『考古学雑誌』第八五巻第二号

荒木麻理子編　二〇〇二『小松市一針B遺跡・一針C遺跡』石川県埋蔵文化財センター

池田祐司・大塚紀宜・大森真　二〇一八「仲島遺跡第五次」『福岡市埋蔵文化財年報（平成二九年度版）』三二号

石隈喜佐雄・七田忠昭編　一九七九『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第四六集

石黒立人編　一九九一『朝日遺跡Ⅰ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第三〇集

出原恵三編　二〇〇四『西分増井遺跡Ⅱ』（財）高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第八三集

井上洋一・松浦宥一郎・平尾良光・早川泰弘・榎本淳子・鈴木浩子　二〇〇二「東京国立博物館所蔵弥生時代青銅器の鉛同位体比」『ＭＵＳＥＵＭ』第五七七号

上原真人（研究代表者）　二〇〇五『紫金山古墳の研究―古墳時代前期における対外交渉の考古学的研究』科研費成果報告書（改訂版『紫金山古墳の研究―墳丘・副葬品の調査』京都大学大学院文学研究科考古学研究室）

梅原末治　一九三三『讃岐高松石清尾山石塚の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第一二冊

大賀克彦　二〇二〇「鉛同位体比による三角縁神獣鏡製作地の検討」『古代学』第一一号

岡部裕俊編　二〇一七『新訂版 史跡曽根遺跡群 平原遺跡』糸島市文化財調査報告書第一六集

岡村秀典　一九八四「前漢鏡の編年と様式」『史林』第六七巻第五号

岡村秀典　一九八六「中国の鏡」『弥生文化の研究』第六巻、雄山閣

岡村秀典　一九九三ａ「福岡県平原遺跡出土鏡の検討」『季刊考古学』第四三号

岡村秀典　一九九三ｂ「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第五五集

岡村秀典　一九九九『三角縁神獣鏡の時代』吉川弘文館

岡村秀典　二〇一〇「漢鏡５期における淮派の成立」『東方学報』京都第八五冊

岡村秀典　二〇一九「王莽鏡論」『東方学報』京都第九四冊

岡村秀典　二〇二一「舶載された王莽宮廷鏡―大阪府紫金山古墳出土方格規矩四神鏡の鉛同位体比分析から」『史林』第一〇四巻第五号

岡山県古代吉備文化財センター編　二〇〇〇『高塚遺跡・三手遺跡２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告一五〇

小田富士雄・韓炳三編　一九九一『日韓交渉の考古学』弥生時代篇、六興出版

河北省文物研究所　一九九六『歴代銅鏡紋飾』、河北美術出版社

蒲原宏行　二〇〇三「佐賀平野における弥生後期の土器編年」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』第二七集（同二〇一九『弥生・古墳時代論叢』六一書房に再録）

蒲原宏行　二〇〇九「桜馬場「宝器内蔵甕棺」の相対年代」『地域の考古学』佐田茂先生佐賀大学退任記念論文集（同右）

岸本直文　二〇一四「倭における国家形成と古墳時代開始のプロセス」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一八五集（同二〇二〇『倭王権と前方後円墳』塙書房に加筆再録）

北島大輔　二〇〇二「弥生青銅器の生産と流通―伊勢湾沿岸を舞台として」『川から海へ１』一宮市博物館秋季特別展図録

北島大輔　二〇一一「弥生青銅器の発達と終焉」『弥生時代の考古学４古墳時代へ

の胎動』同成社
木下尚子　二〇一三「貝輪から銅釧へ」同『南島貝文化の研究 貝の道の考古学』法政大学出版局
久保穣二朗　二〇〇九「因幡地域における破鏡・破砕鏡について」『考古学と地域文化』一山典還暦記念論集
車崎正彦　二〇〇二「総説 中国鏡と倭鏡」同編『考古資料大観』第五巻、弥生・古墳時代 鏡、小学館）
黒坂秀樹編　二〇〇一『古保利古墳群』高月町文化財調査報告書第五集
湖南省博物館　一九七九「長沙金塘坡東漢墓發掘簡報」『考古』第五期
小林行雄　一九五五「古墳の発生の歴史的意義」『史林』第三八巻第一号（同一九六一『古墳時代の研究』青木書店に加筆再録）
小松譲編　二〇一二『中原遺跡』Ⅵ佐賀県文化財調査報告書第一九三集
齋藤　努　二〇〇三「鉛同位体比産地推定法とデータの解釈について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一〇八集
佐賀市教育委員会文化振興課　二〇二一『さがの遺跡を掘る―七ヶ瀬遺跡発掘調査速報』佐賀市発掘調査速報展
坂本憲昭　二〇〇六「高知県出土青銅器について」『田村遺跡群Ⅱ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第八五集
清水邦彦　二〇二三『銅鐸をつくる―弥生時代の鋳造技術』茨木市立文化財資料館図録
下垣仁志　二〇一六『日本列島出土鏡集成』同成社
下條信行　一九八二「銅矛形祭器の生産と波及」森貞次郎博士古稀記念『古文化論集』上巻
杉原荘介・原口正三　一九六一「佐賀県桜馬場遺跡」『日本農耕文化の生成』東京堂
角信一郎編　二〇一三『尼寺一本松遺跡』佐賀市埋蔵文化財調査報告書第七七集
角田徳幸・山崎修編　二〇〇二『加茂岩倉遺跡』本編、島根県教育委員会・加茂町教育委員会
武末純一　一九八二「埋納銅矛論」『古文化談叢』第九集
田尻義了　二〇一二『弥生時代の青銅器生産体制』九州大学出版会
田中稿二　一九九三「多鈕細文鏡と渡来集団」『季刊考古学』第四三号
田中　琢　一九七〇「『まつり』から『まつりごと』へ」『古代の日本5近畿』角川書店
辻田淳一郎　二〇一九『鏡の古代史』角川選書
寺沢　薫　一九八八「纒向型前方後円墳の築造」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズⅣ
永田稲男・太田正和・市田佳奈子　二〇一三『丁永遺跡6・8区　天神軒遺跡2区八ッ戸遺跡5・6区』小城市文化財調査報告書第二二集
永峯光一　一九八八「弥生時代の信仰と葬制」『長野県史』考古資料編
中村弘編　一九九九『向山古墳群・市条寺古墳群・一乗寺経塚・矢別遺跡』兵庫県文化財調査報告第一九一冊
長家伸編　二〇〇四『那珂三四』福岡市埋蔵文化財調査報告書第八〇〇集
難波洋三　二〇一一a「銅鐸群の変遷」『豊饒をもたらす響き 銅鐸』大阪府立弥生文化博物館図録四五
難波洋三　二〇一一b「扁平鈕式以後の銅鐸」『大岩山銅鐸から見えてくるもの』滋賀県立安土城考古博物館
難波洋三　二〇一二a「柳沢遺跡出土銅鐸の位置づけ」『中野市柳沢遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書一〇〇
難波洋三　二〇一二b「銅鐸を使う国々」『卑弥呼がいた時代』兵庫県立考古博物館
難波洋三　二〇一九「弥生時代の青銅器の鉛同位体比分析とＩＣＰ分析」奈良文化財研究所埋蔵文化財センター『埋蔵文化財ニュース』一七四

仁田坂聡編　二〇〇八『桜馬場遺跡』唐津市文化財調査報告書第一四七集
西田京平・平尾良光　二〇一五「金属製品の産地推定」『石座神社遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第一八九集
野島　永　二〇〇〇「弥生時代の対外交易と流通―弥生墳墓の副葬鉄器を通して」広瀬和雄編『丹後の弥生王墓と巨大古墳』季刊考古学・別冊一〇
橋口達也　一九七九「甕棺の編年的研究」福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』三一中巻
濱田延充　二〇〇六「弥生時代後期初頭の実年代に関する覚書」『喜谷美宣先生古稀記念論集』
原田智也編　二〇一六『重留遺跡―総括編』北九州市文化財調査報告書第一四二集
春成秀爾・小林謙一・坂本稔・今村峯雄・尾嵜大真・藤尾慎一郎・西本豊弘　二〇一一「古墳出現期の炭素一四年代測定」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一六三集
東影悠編　二〇一一「桜井茶臼山古墳第7・8次調査概要報告」寺沢薫『東アジアにおける初期都宮および王墓の考古学的研究』研究成果報告書
樋口隆康　一九五三「中国古鏡銘文の類別研究」『東方学』第七号（同一九八三『展望アジアの考古学　樋口隆康教授退官記念論集』新潮社に再録）
櫃本誠一　二〇〇二『兵庫県の出土古鏡』学生社
平尾良光・鈴木浩子・榎本淳子　一九九五「百間川原尾島遺跡から出土した鉄剣形銅剣についての自然科学的研究」『百間川原尾島遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告九七
平尾良光・鈴木浩子　一九九六「虺龍文鏡および福岡県北九州市近郊から出土した弥生～古墳時代の青銅製遺物の鉛同位体比」『北九州市立考古博物館研究紀要』第三号
平尾良光・鈴木浩子　一九九九「弥生時代青銅器と鉛同位体比」平尾良光編『古代青銅の流通と鋳造』鶴山堂
平尾良光・鈴木浩子　二〇〇四「西分増井遺跡から出土した青銅器の鉛同位体比」『西分増井遺跡Ⅱ』高知県文化財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第八三集
平尾良光　二〇一一「鉛同位体比分析」『旧練兵場遺跡Ⅱ（第一九次調査）』香川県教育委員会・独立行政法人国立病院機構善通寺病院
平田定幸　一九九四「墳墓」春日市教育委員会編『奴国の首都　須玖岡本遺跡』吉川弘文館
廣田和穂編　二〇一二『中野市柳沢遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書一〇〇
福永伸哉　二〇〇八「青銅鏡の政治性萌芽」『弥生時代の考古学7　儀礼と権力』同成社
藤田三郎　一九九七「青銅器鋳造関連遺物」「まとめ」『唐古・鍵遺跡　第六一次発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財調査概要一六
松本岩雄・足立克己編　一九九六『出雲神庭荒神谷遺跡』島根県教育委員会
馬淵久夫　一九八九「壬生西谷遺跡出土「長宜子孫」連弧紋鏡の鉛同位体比」『壬生西谷遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第七五集
馬淵久夫　二〇一一「漢式鏡の化学的研究（2）―鉛同位体比の「前漢鏡タイプ」から「後漢鏡タイプ」への移行について」『考古学と自然科学』第六二号
馬淵久夫　二〇一六「漢式鏡の化学的研究（5）―平原遺跡出土銅鏡の製作地について」『考古学と自然科学』第七〇号
馬淵久夫・平尾良光　一九八二「鉛同位体比からみた銅鐸の原料」『考古学雑誌』第六八巻第一号
馬淵久夫・平尾良光　一九八三「鉛同位体比法による漢式鏡の研究（二）」『MUSEUM』三八二号

馬淵久夫・平尾良光　一九八五「三雲遺跡出土青銅器・ガラス遺物の鉛同位体比」『三雲遺跡　南小路地区編』福岡県文化財調査報告書第六九集
馬淵久夫・平尾良光　一九八七「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比―青銅器との関連を中心に」『考古学雑誌』第七三巻第二号
馬淵久夫・平尾良光・西田守夫　一九九一「平原弥生古墳出土青銅鏡およびガラスの鉛同位体比」『平原弥生古墳　大日霎貴の墓』葦書房
水ノ江和同　一九九七『伊方小学校遺跡第2・3地点　宝珠遺跡』方城町文化財調査報告書第四集
美濃市教育委員会　二〇一二『美濃観音寺山古墳・長福寺遺跡・西観音寺遺跡・東観音寺遺跡』美濃市文化財調査報告書三四号
南健太郎　二〇一〇「漢代における踏み返し鏡製作について」『ＦＵＳＵＳ』二（同二〇一九『東アジアの銅鏡と弥生社会』同成社に再録）
宮井善朗　一九九四「後期の甕棺―後漢鏡の流入を巡って」松村道博編『飯氏遺跡群2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第三九〇集
村木誠編　二〇〇三『埋蔵文化財調査報告書四六 高蔵遺跡（第三四次・第三九次）』名古屋市文化財調査報告六〇
森貞次郎　一九六六「九州」『日本の考古学Ⅲ弥生時代』河出書房
森貞次郎　一九六八「弥生時代における細形銅剣の流入について―細形銅剣の編年的考察」『日本民族と南方文化』平凡社
森井千賀子編　二〇一七『須玖タカウタ遺跡3』春日市文化財調査報告書第七七集
森岡秀人　一九八五「弥生時代暦年代論をめぐる近畿第Ⅴ様式の時間幅」『信濃』第三七巻第四号
モンテリウス（濱田耕作訳）　一九三二『考古学研究法』岡書院
柳田康雄　一九八二「三・四世紀の土器と鏡―「伊都」の土器からみた北部九州」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』
柳田康雄　二〇二二「弥生土器編年の遍歴」『纒向学の最前線』纒向学研究センター設立一〇周年記念論集
渡辺信一郎　一九九六『天空の玉座』柏書房

《謝辞》
本論は二〇二三年度ＪＳＰＳ科研費「漢晋変革の考古学的研究」（21H00593）の成果の一部であり、二〇二三年度史学研究会大会での講演「倭奴国王冊封以前」をもとにしている。本論の執筆にあたっては、井上義也・大賀克彦・大塚紀宜・川上洋一・重藤輝行・難波洋三・森下章司・吉田広氏から教示をえた。ここに厚く御礼を申し上げる。